

京都府遺跡調査概報

第109冊

1. 三角古墳群
2. 内里八丁遺跡第19次
3. 関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡

2003

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要がありますが、当センターでは、それに対応するために3種の刊行物を刊行してまいりました。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しています。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成14・15年度に実施した発掘調査のうち、京都府港湾事務所、京都府田辺土木事務所、都市基盤整備公団関西支社関西学術研究都市事業本部の依頼を受けて行った三角古墳群、内里八丁遺跡第19次、関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、舞鶴市教育委員会、京都市教育委員会、八幡市教育委員会、精華町教育委員会、木津町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成15年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 上田正昭

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 三角古墳群
2. 内里八丁遺跡第19次
3. 関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.	三角古墳群	舞鶴市字下安久	平15. 4. 24～6. 10	京都府土木建築部	岡崎研一
2.	内里八丁遺跡第19次	八幡市大字内里小字日向堂	平14. 12. 18～平15. 3. 5	京都府土木建築部	引原茂治
3.	関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡			都市基盤整備公団	筒井崇史
	赤ヶ平遺跡(第3次)	相楽郡木津町大字木津小字赤ヶ平	平14. 6. 4～10. 10		
	片山古墳群	相楽郡木津町大字木津小字片山	平14. 10. 28～平15. 1. 20		
	内田山遺跡・内田山古墳群(第3次)	相楽郡木津町大字木津小字内田山	平15. 1. 21～2. 27		

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。

また、国土地理院発行地形図の方位は経度の真北をさす。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。なお、遺物の写真撮影は、同資料係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

1. 三角古墳群発掘調査概要	1
2. 内里八丁遺跡第19次発掘調査概要	7
3. 関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成14年度発掘調査概要	19
(1)赤ヶ平遺跡(第3次)	20
(2)片山古墳群	25
(3)内田山遺跡・内田山古墳群(第3次)	26

挿図目次

1. 三角古墳群	
第1図 調査地および周辺遺跡分布図	2
第2図 三角古墳群位置図	3
第3図 三角2・3号墳地形測量および調査範囲図	4
第4図 三角2・3号墳遺構配置図	5
第5図 三角3号墳主体部断面図	5
第6図 三角4号墳地形測量図	6
2. 内里八丁遺跡第19次	
第7図 調査地および周辺遺跡分布図	8
第8図 調査地断面図(部分)	9
第9図 トレンチ配置図	10
第10図 トレンチ平面図	12
第11図 出土遺物実測図(1)	14
第12図 出土遺物実測図(2)	15
第13図 出土遺物実測図(3)	16
第14図 作業風景	18
3. 関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡	
第15図 調査地位置図	19
(1)赤ヶ平遺跡(第3次)	

第16図	赤ヶ平遺跡トレンチ配置図-----	20
第17図	赤ヶ平遺跡第1トレンチ遺構配置図-----	21
第18図	赤ヶ平遺跡第2～5トレンチ遺構配置図-----	22
第19図	赤ヶ平遺跡木棺墓S X 63実測図-----	23
第20図	赤ヶ平遺跡土坑S K 84実測図-----	23
第21図	赤ヶ平遺跡第6トレンチ遺構配置図-----	24
第22図	赤ヶ平遺跡出土遺物実測図(1)-----	24
第23図	赤ヶ平遺跡出土遺物実測図(2)-----	25
(2)片山古墳群		
第24図	片山古墳群地形測量図-----	26
(3)内田山遺跡・内田山古墳群(第3次)		
第25図	内田山遺跡・内田山古墳群トレンチ配置図-----	27
第26図	内田山遺跡・内田山古墳群第6・7トレンチ遺構配置図-----	28
第27図	内田山遺跡・内田山古墳群出土遺物実測図(1)-----	30
第28図	内田山遺跡・内田山古墳群出土遺物実測図(2)-----	31

付 表 目 次

2. 内里八丁遺跡第19次	
付表	調査次数一覧表----- 7

図 版 目 次

1. 三角古墳群	
図版第1	(1)遠景(東から) (2)三角2号墳近景(東から) (3)1号経塚近景(北西から)
図版第2	(1)1号経塚筒型容器出土状況(東から) (2)三角3号墳近景(西から) (3)三角3号墳主体部、2・3号経塚検出状況(西から)
図版第3	(1)3号経塚数珠玉出土状況(東から)

(2)三角3号墳主体部断ち割り状況(南から)

(3)三角3号墳主体部断ち割り断面(東から)

図版第4 (1)三角4号墳近景(北から) (2)三角4号墳石室近景(南から)

2. 内里八丁遺跡第19次

図版第5 調査地遠景(南東から)

図版第6 (1)トレンチ全景(北西から) (2)近世遺構(南西から)

図版第7 (1)中世遺構(北から) (2)古代遺構(西から)

図版第8 (1)土坑S K06断面(北西から) (2)溝S D07・35(西から)

図版第9 (1)溝S D07・35(北西から) (2)溝S D07遺物出土状況(西から)

図版第10 (1)溝S D35遺物出土状況(南西から) (2)溝S D35遺物出土状況(南から)

図版第11 (1)溝S D29(西から) (2)溝S D29断面(西から)

図版第12 出土遺物(1)

図版第13 出土遺物(2)

図版第14 出土遺物(3)

3. 関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡

(1)赤ヶ平遺跡(第3次)

図版第15 (1)遺跡全景(北から) (2)遺跡全景(東から)

図版第16 (1)第1トレンチ上層遺構全景(西から) (2)第1トレンチ下層遺構全景(西から)
(3)第1トレンチ土坑S K62遺物出土状況(南から)

図版第17 (1)第2・5トレンチ全景(西から) (2)第4トレンチ全景(北から)
(3)第4トレンチ木棺墓S X63全景(南東から)

図版第18 (1)第3トレンチ土坑S K64全景(西から)
(2)本調査土坑S K84遺物出土状況(東から)
(3)第1トレンチ作業風景

図版第19 (1)本調査地全景(南東から) (2)本調査地全景(北西から)
(3)第6トレンチ全景(南東から)

図版第20 (1)本調査溝S D76全景(東から) (2)本調査溝S D74・75全景(北から)
(3)関係者説明会風景

(2)片山古墳群

図版第21 (1)片山2号墳調査前全景(南東から) (2)片山2号墳調査後全景(南東から)
(3)試掘調査地全景(南東から)

(3)内田山遺跡・内田山古墳群(第3次)

図版第22 (1)調査地全景(北から) (2)調査地全景(上が南)

図版第23 (1)第6・7トレンチ全景(北東から) (2)第6・7トレンチ全景(東から)

図版第24 (1)調査作業風景(北東から)

(2)土器溜まり S X113遺物出土状況(南西から)

(3)土坑 S K101遺物出土状況(北東から)

赤ヶ平遺跡(第3次)・内田山遺跡

図版第25 (1)赤ヶ平遺跡出土遺物

(2)内田山遺跡出土遺物(1)

内田山遺跡・内田山古墳群(第3次)

図版第26 (1)内田山遺跡出土遺物(2)

(2)内田山古墳群出土遺物

赤ヶ平遺跡(第3次)

図版第27 胎土薄片(1)

図版第28 胎土薄片(2)

1. ^{みすみ}三角古墳群発掘調査概要

1. はじめに

この調査は、重要港湾舞鶴港改修事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。三角古墳群は、京都府教育委員会と舞鶴市教育委員会の分布調査によって、新たに発見された古墳群で、舞鶴市字下安久に所在する。分布調査では、丘陵の腹部で1基、尾根筋で3基の計4基の古墳状隆起が確認された。このうち、事業予定地にかかる古墳状隆起は、尾根筋の2・3号墳と丘陵腹部の4号墳である。2・3号墳は丘陵稜線上の高まりで、4号墳のみ石材とその抜き取り穴が認められた。今年度は、対象地である3か所が古墳であるか否か、また、尾根筋上にはほかの遺構が存在しないかを調べるために試掘調査を行った。現地調査は、平成15年4月24日に開始し、同年6月10日に終了した。調査面積は、約300㎡である。なお、今回の調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第1係長奥村清一郎、専門調査員岡崎研一が担当した。調査期間中は、京都府教育委員会・京都府港湾事務所・舞鶴市教育委員会・京都府立丹後郷土資料館・地元町内会などの関係諸機関の指導・助言・協力をいただいた。また、地元の方々には、作業員・調査補助員・整理員として従事していただいた。^(注1)ここに記して、感謝の意を表したい。

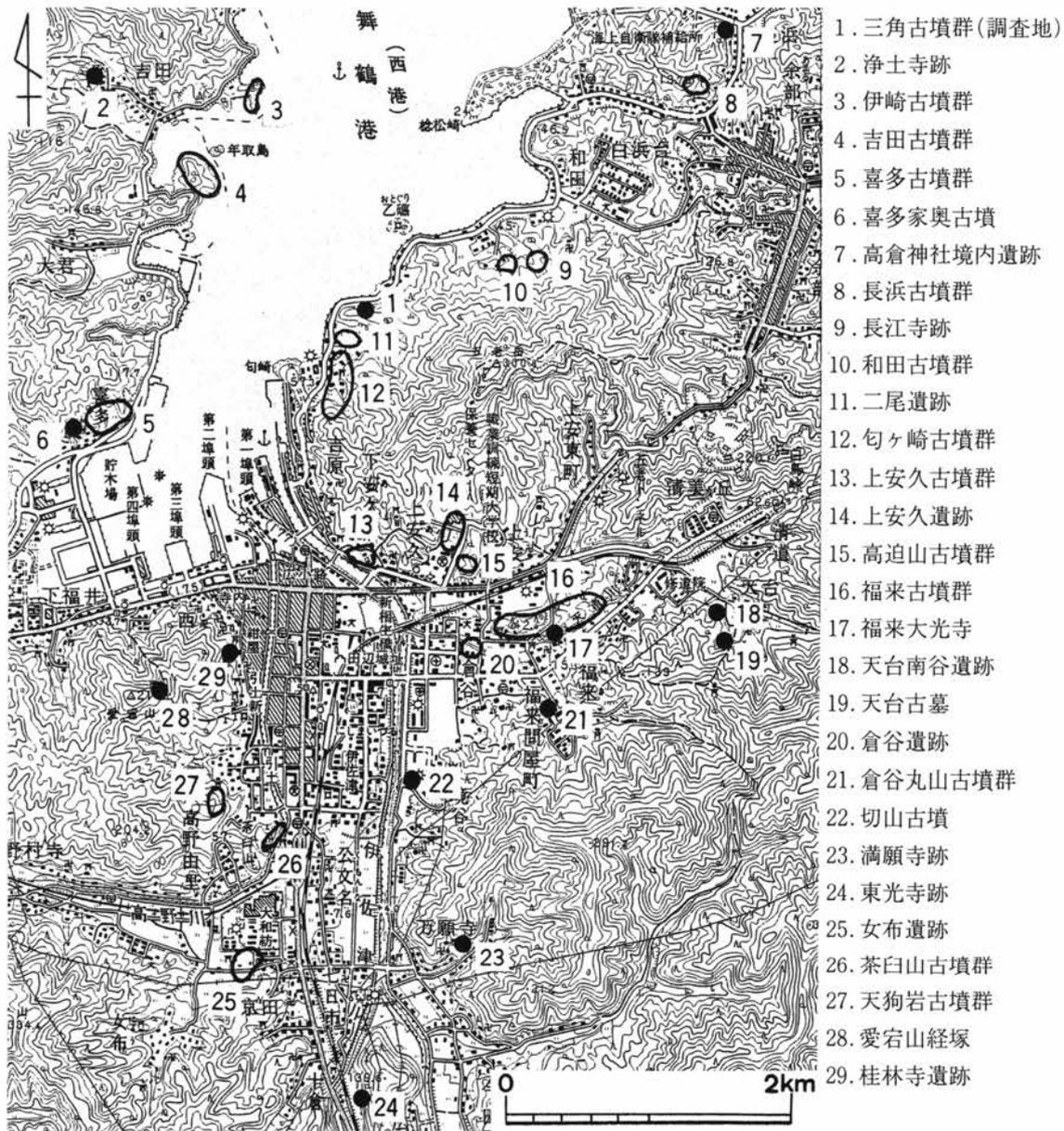
2. 位置と環境(第1図、図版第1)

舞鶴市は、京都府北部に位置する。同市は、若狭湾から南に入り込んだ舞鶴湾に面しており、湾に注ぎ込む河川が形成した沖積平野が細長く広がる。このような地勢から4つの地域に分けられる。大浦半島を中心とする大浦地区、志楽川・祖母谷川・与保呂川の沖積平野からなる舞鶴東地区、由良川流域の加佐地区、高野川・伊佐津川流域の舞鶴西地区である。三角古墳群は、舞鶴西地区に位置する。舞鶴湾(西港)最奥に注ぐ伊佐津川河口付近に、小さく突出した匂崎がある。当古墳群は、匂崎の北東約600mに所在する。この地は、標高約300mの五老岳から西方に派生する丘陵先端の尾根筋にあたる。古墳からは、舞鶴湾(西港)を一望することができる。

舞鶴地域の古墳の総数は440基を数えるが、横穴式石室を内部主体とするものは120基あまりで、しかも半数以上の古墳が大浦地区に集中する。伊佐津川右岸に位置する切山古墳は、5世紀初頭の築造で、舞鶴市最古の古墳である。土坑中央に組み合わせ式石棺を安置する。^(注2)周辺には数か所に古墳群が所在するが、未調査であり詳細については不明である。円墳4基からなる天狗岩古墳群の1基は、横穴式石室を内部主体とし、径25m、高さ1mを測る比較的大型の古墳も含まれる。唯一、調査された古墳としては、倉谷丸山2号墳がある。その結果、6世紀後葉に築造され、7

世紀初頭に追葬されていたことが判明した。^(注3) これらに対し臨海部に位置する古墳群は、径10m強の規模が主であり、単独ないし数基から構成される。これらの古墳群は、農耕を主とする一族のものでなく、漁労民との関係をうかがわせる資料とされている。^(注4) 調査された古墳としては、喜多家奥古墳がある。喜多家奥古墳は、6世紀後半に築造され、3回の埋葬が確認されている。^(注5) 大浦地区に所在する三浜丸山古墳群は、横穴式石室を内部主体とする古墳で3基以上から構成される。6世紀末に造墓が開始され、7世紀中葉まで追葬が行われた。^(注6)

弥生時代中期～飛鳥時代にかけての集落遺跡である女布遺跡からは、弥生～古墳時代の竪穴式住居跡群と飛鳥時代の倉庫群が確認されている。倉庫群については、官衙的性格の強い遺跡と考えられている。^(注7) 平安時代の遺跡としては、9世紀中葉～10世紀中葉にかけての集落遺跡である倉谷遺跡がある。官衙遺跡としての可能性をもつ遺跡である。^(注8) 匂ヶ崎古墳群北側の低地には、土師



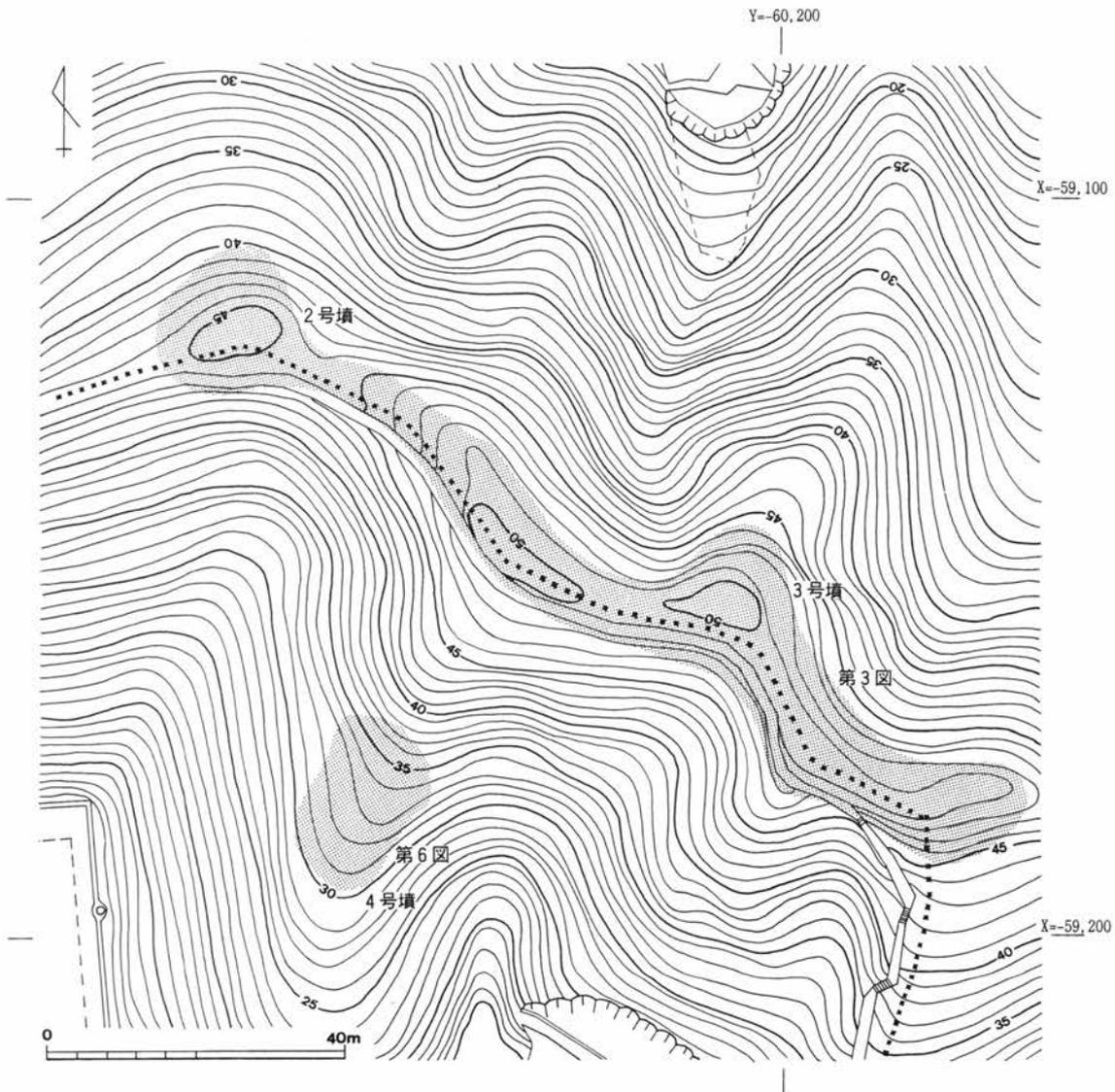
第1図 調査地および周辺遺跡分布図(国土地理院 1/50,000舞鶴)

器や黒色土器が散布する平安時代の二尾遺跡が存在する。

中世の主要遺構としては、経塚・寺院跡・古墓などがある。経塚は、27遺跡で確認されている。その内、7遺跡が大浦地区に集中する。寺院跡については、市内全域で散見でき、古墓においては、その発見例が非常に少ないといった状況である。この中で調査された経塚としては、祖母谷川上流に面した丘陵上(舞鶴東地区)に位置する橋木林遺跡と、舞鶴西地区に位置する天台南谷遺跡がある。橋木林遺跡から検出した経塚は、13世紀前半とされる^(注9)。天台南谷遺跡では、竪穴(主土坑)と竪穴の一方に天井を残してトンネル状の横穴(埋納土坑)からなる経塚が発見されている。12世紀後半に営まれたとされる^(注10)。

2. 調査概要(第2図)

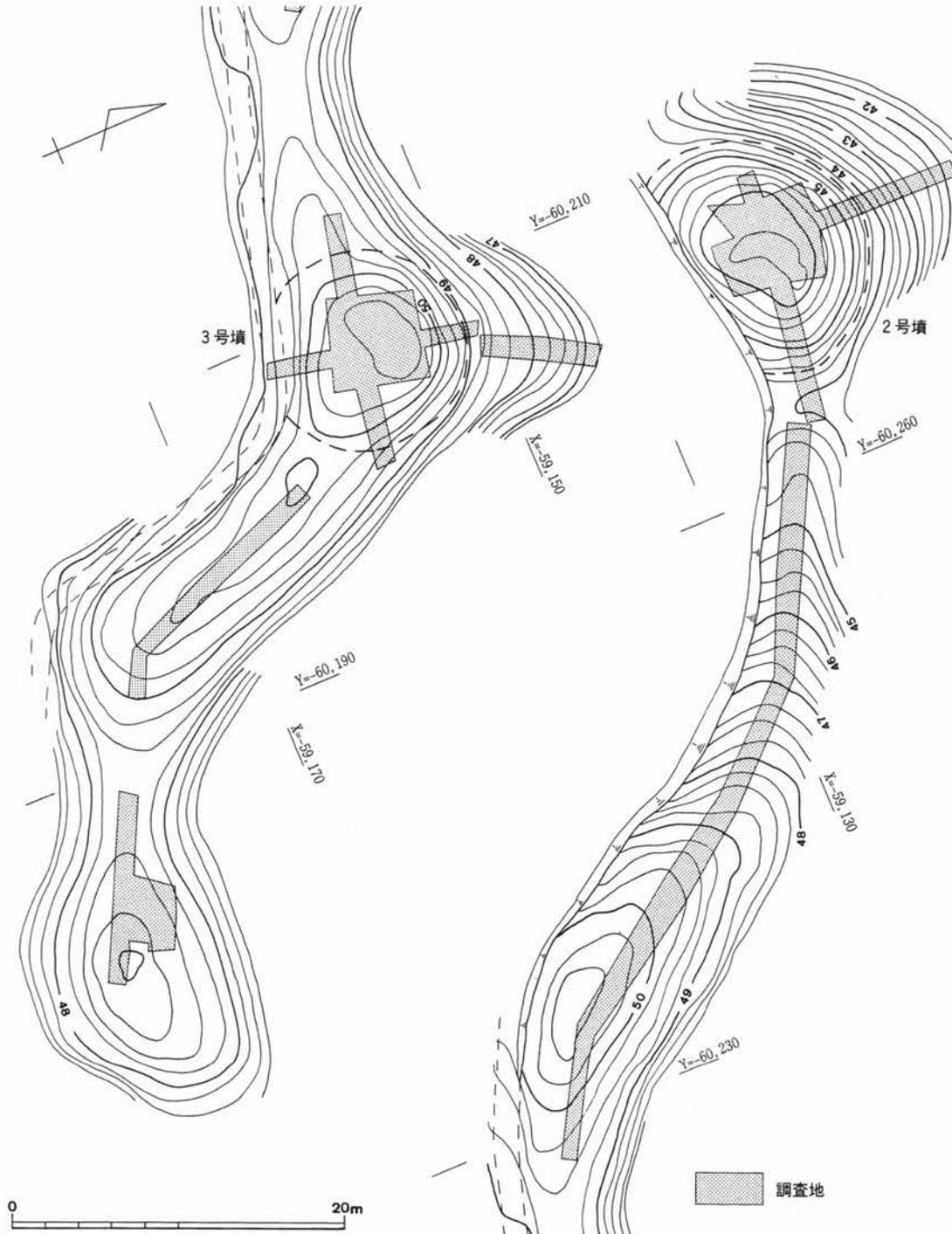
今回の調査は、遺構の有無と範囲確認に主眼を置いた試掘調査である。このため、3か所の古墳状隆起それぞれに、十字の試掘坑を設定した。また、丘陵尾根筋上にも試掘坑を設定した(第



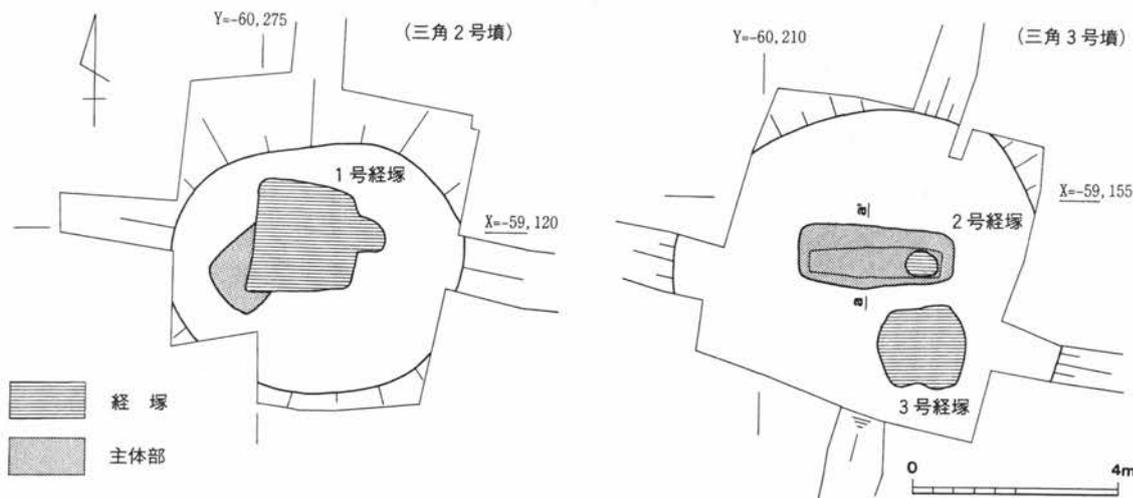
第2図 三角古墳群位置図

3・6図)。

三角2号墳(第4図、図版第1・2) 丘陵尾根筋上の西端に位置する古墳である。調査前は、高さ約2.5mの古墳状隆起が認められた。試掘の結果、径15m、高さ2mほどの古墳であることが判った。墳丘南側裾部は、山道によってわずかに削平を受けていた。墳頂部中央から主体部1基を検出した。主体部は経塚と重複していたため、全長については不明である。経塚(1号経塚)は、古墳盛土を掘り込む形で構築されていた。その形状は、検出状況から竪穴(主土坑)と竪穴の壁面に穿たれた横穴(埋納土坑)とからなるもので、埋納土坑の天井部が削平された状況で検出さ



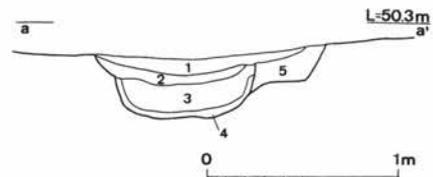
第3図 三角2・3号墳地形測量および調査範囲図



第4図 三角2・3号墳遺構配置図

れた。規模は、主土坑が2m四方で、埋納土坑が0.6×0.5mを測る。土坑内には、拳大から人頭大の石が多数見られた。埋納土坑中央から土師製の筒型容器が、石に囲まれて出土した。筒型容器は、口径約10cmである。

三角3号墳(第4・5図、図版第2・3) 丘陵尾根筋ほぼ中央に構築された古墳である。調査前は、高さ約1mの古墳状隆起が認められた。試掘の結果、径12m、高さ1mほどの古墳であることが判った。墳丘南側は、山道によ



第5図 三角3号墳主体部断面図

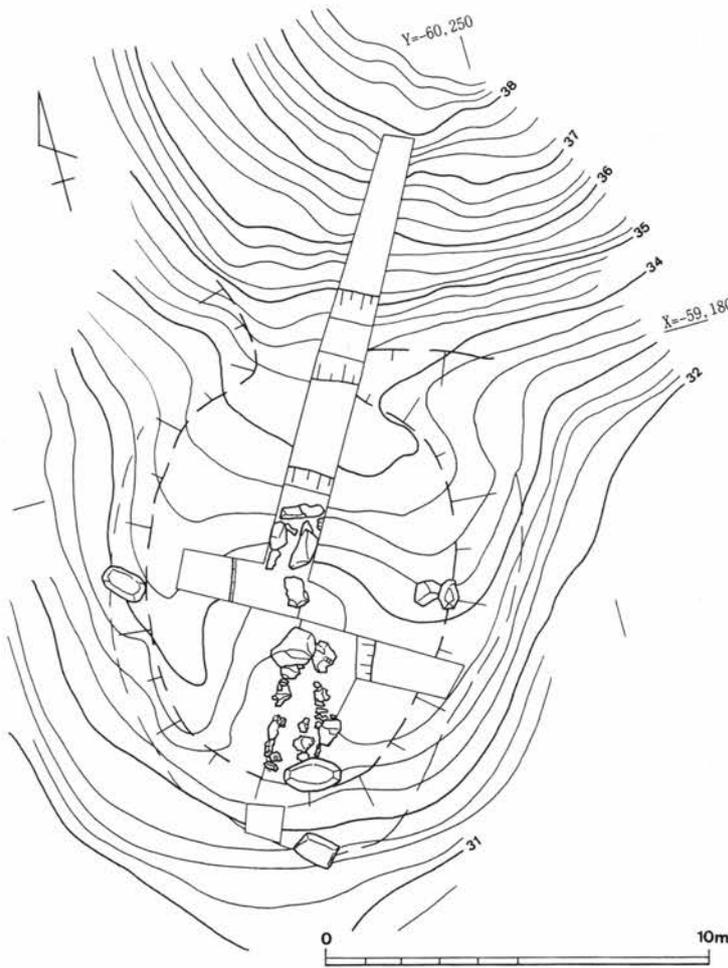
- 1. 黄褐色土 2. 暗黄褐色土
- 3. 暗黄褐色砂質土 4. 黄白色砂土
- 5. 赤黄色土

て削平されていた。墳頂部中央部から主体部1基と経塚2基(2・3号経塚)を検出した。主体部は、2号経塚と重複していた。主体部中央を試掘した結果、土坑の南寄りに棺痕跡が認められた。2号経塚は径約0.6m、3号経塚は約1.5m四方の土坑からなる。両経塚内には、石が多数見られる。3号経塚からは、検出面から数珠玉1点が出土している。水晶製で大玉であることから、母珠であると考え。この玉は、京都市の弁天島経塚から出土しているものと類似する。

三角4号墳(第6図、図版第4) 2号墳南側の丘陵中腹に築造された古墳で、下安久の狭小な平地部を望むことのできる所にある。この平地部を挟んだ南側の丘陵部には、石材が散乱する匂ヶ崎古墳群が展開する。本古墳も、調査前は大きな石材が散乱し、古墳状隆起の中央が大きく窪んでおり石材の抜き取り穴と考えられた。このような状況から、下安久の狭小な平地部を基盤とする一族の古墳が、三角・匂ヶ崎古墳群ではないかと想定された。試掘の結果、横穴式石室を埋葬施設とする古墳であることを確認した。石室は、最下段の石組付近が遺存していると思われ、部分的に石がすべて抜かれた箇所もある。石室の規模は、全長約7m、幅約1mを測る。墳丘の北側からは、古墳に伴う区画溝が認められたことから、径約12mの円墳であると思われる。

3. まとめ

今回の試掘調査の結果、木棺直葬墳2基、横穴式石室墳1基、経塚3基を検出した。いずれも



第6図 三角4号墳地形測量図

検出した状態で調査を終えた。本調査については、来年度に行う予定であり、それぞれの遺構規模や出土遺物については来年度にまとめて報告する。

舞鶴市では、最近、古墳の調査例が増加しつつある。今回の調査で臨海部の下安久においても古墳の存在が明らかとなった。

経塚は、その形態から京都府久美浜町に所在する豊谷遺跡で確認している経塚に類似する。本調査の成果に期待したい。

(岡崎研一)

注1 稲田律子・太田とし子・川瀬恵子・坂本美智代・塩見光代・寺尾貴美子・寺師定一郎・中村ひろみ・難波靖明・浜田多津代・林田清一・藤原志津枝・藤原千鶴子・前川伸明・真下春美・山尾路明

注2 京都府教育委員会(『京都府文化財調査報告』第22冊) 1961

注3 吉岡博之「倉谷丸山2号墳発掘調査概報」(『舞鶴市文化財調査報告』第17集 舞鶴市教育委員会) 1991

注4 舞鶴市史編さん委員会『舞鶴市史 通史編(上)』 舞鶴市役所 1993

注5 松本達也「喜多家奥古墳発掘調査概要報告書」(『舞鶴市文化財調査報告』第25集 舞鶴市教育委員会) 1995

注6 松本達也「三浜丸山古墳群発掘調査概要報告書」(『舞鶴市文化財調査報告』第38集 舞鶴市教育委員会) 2002

注7 松本達也「女布遺跡第3次発掘調査概要報告書」(『舞鶴市文化財調査報告』第37集 舞鶴市教育委員会) 2002

注8 松本達也「倉谷遺跡第2次発掘調査概要報告書」(『舞鶴市文化財調査報告』第23集 舞鶴市教育委員会) 1994

注9 中島史子「橋木林遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第96冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

注10 松本達也ほか「上佐波賀遺跡・天台南谷遺跡発掘調査概要報告書」(『舞鶴市文化財調査報告』第32集 舞鶴市教育委員会) 2000

2. ^{うちさとはっちょう}内里八丁遺跡第19次発掘調査概要

1. はじめに

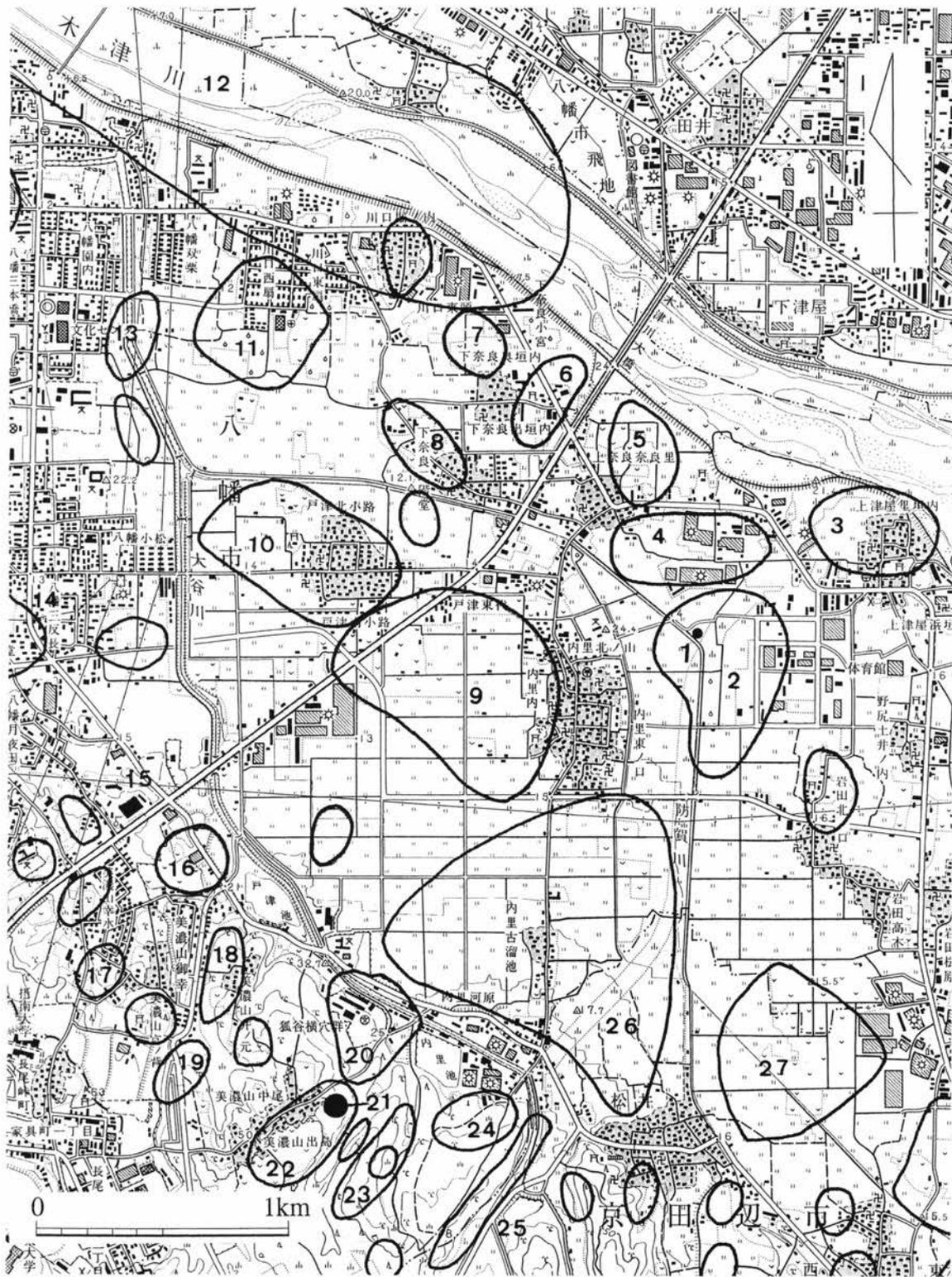
内里八丁遺跡は、木津川西岸の自然堤防上に位置する、弥生時代から中世にかけての複合遺跡である。これまで、主に第二京阪道路(京都南道路)の建設に伴い、当調査研究センターや(財)京都府京都文化博物館・八幡市教育委員会などが調査を実施し、弥生時代の水田跡や古墳時代から中世にかけての集落跡などを確認している。また、奈良時代の古山陰道に関係すると考えられる溝なども確認されている。今回の調査は、主要地方道八幡木津線道路新設改良事業に伴うもので、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

今回の調査地は、八幡市内里小字日向堂に所在する。平成12・13年度に当調査研究センターが実施した第16・17次調査B地区と、第18次調査第1トレンチの間に当たる地点である。

現地調査は平成14年12月18日に開始した。まず遺構面まで重機によって盛土や耕作土などを除去し、その後、人力で精査や遺構掘削および下層掘り下げなどを行った。また、この間、実測や写真撮影などの記録作業も並行して行った。平成15年3月5日に調査を終了した。調査面積は約400㎡である。調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長石井清司、主任調査員引原茂治が担当した。

付表 調査回数一覧表

回数	調査年度	調査地	調査主体	調査原因	文献
1	昭和63	試掘(今福・内垣内)	京都府埋文センター	第二京阪道路	京都府遺跡調査報告書26
2	平成元	試掘(八丁・中島・日向堂)	京都府埋文センター	第二京阪道路	京都府遺跡調査報告書26
3	平成2	第二京阪A地区	京都府埋文センター	第二京阪道路	京都府遺跡調査報告書26
4	平成3	第二京阪A地区	京都府埋文センター	第二京阪道路	京都府遺跡調査報告書26
5	平成3	試掘	八幡市教育委員会	上津屋土地区画整理事業	八幡市埋蔵文化財発掘調査概報13
6	平成4	試掘	八幡市教育委員会	上津屋土地区画整理事業	八幡市埋蔵文化財発掘調査概報13
7	平成4	第二京阪A・B地区	京都府埋文センター	第二京阪道路	京都府遺跡調査報告書26
8	平成5	第二京阪B地区	京都府埋文センター	第二京阪道路	京都府遺跡調査報告書30
9	平成6	第二京阪D地区	京都府埋文センター	第二京阪道路	京都府遺跡調査報告書30
10	平成7	第二京阪D地区	京都府埋文センター	第二京阪道路	京都府遺跡調査報告書30
11	平成7	第二京阪G地区	京都府埋文センター	第二京阪道路	京都府遺跡調査報告書30
12	平成8	第二京阪G地区	京都文化博物館	第二京阪道路	京都文化博物館調査研究報告13
13	平成8	第二京阪C・F地区	京都文化博物館	第二京阪道路	京都文化博物館調査研究報告13
14	平成9	第二京阪E・F地区	京都府埋文センター	第二京阪道路	京都府遺跡調査報告書30
15	平成10	第二京阪E地区	京都府埋文センター	第二京阪道路	京都府遺跡調査報告書30
16	平成12	府道A・B地区	京都府埋文センター	府道	京都府遺跡調査概報103
17	平成13	府道A・B地区	京都府埋文センター	府道	京都府遺跡調査概報103
18	平成14	試掘	京都府埋文センター	府道	京都府遺跡調査概報106
19	平成14	府道B地区	京都府埋文センター	府道	本調査概要報告



第7図 調査地および周辺遺跡分布図(国土地理院1/25,000淀)

- | | | | | |
|-----------|-------------|--------------|-----------|-----------|
| 1. 調査地 | 2. 内里八丁遺跡 | 3. 上津屋遺跡 | 4. 上奈良遺跡 | 5. 上奈良北遺跡 |
| 6. 出垣内遺跡 | 7. 下奈良遺跡 | 8. 今里遺跡 | 9. 内里五丁遺跡 | 10. 戸津遺跡 |
| 11. 河口扇遺跡 | 12. 木津川河床遺跡 | 13. 嶋遺跡 | 14. 女郎花遺跡 | 15. ヒル塚古墳 |
| 16. 幸水遺跡 | 17. 西ノ口遺跡 | 18. 金右衛門垣内遺跡 | 19. 宮ノ背遺跡 | 20. 狐谷横穴群 |
| 21. 王塚古墳 | 22. 本郷遺跡 | 23. 美濃山廃寺 | 24. 女谷横穴群 | |
| 25. 荒坂横穴群 | 26. 新田遺跡 | 27. 魚田遺跡 | | |

調査に当たっては、京都府教育委員会・八幡市教育委員会などの関係機関からご協力いただいた。また、天候不順の中、現地調査に参加していただいた方々に謝意を表したい。^(注1)なお、今回の調査に係わる経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

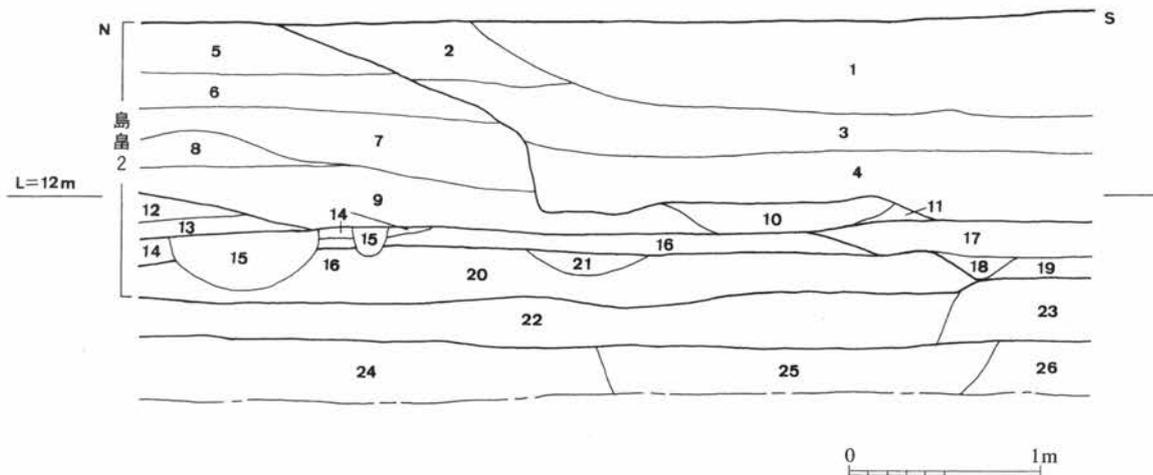
2. 位置と環境

八幡市は、山城盆地の西部に位置し、西側が男山丘陵や美濃山丘陵などの丘陵部となり、東側は木津川によって形成された沖積地が広がる。内里八丁遺跡は、八幡市東側の沖積地に位置し、旧木津川によって形成された自然堤防上に立地する。

八幡市域では、旧石器時代や縄文時代の遺跡の確認例は少ない。前者としてはナイフ形石器が出土した荒坂遺跡・宮ノ背遺跡が、後者としては金衛門垣内遺跡、晩期の土器が出土した内里八丁遺跡がある。弥生時代以降は確認例が増える。弥生時代中期の集落跡として内里八丁遺跡・金衛門垣内遺跡、方形周溝墓群として幸水遺跡がある。後期では、幣原遺跡・西ノ口遺跡・宮ノ背遺跡・中の山遺跡・木津川河床遺跡・内里八丁遺跡がある。

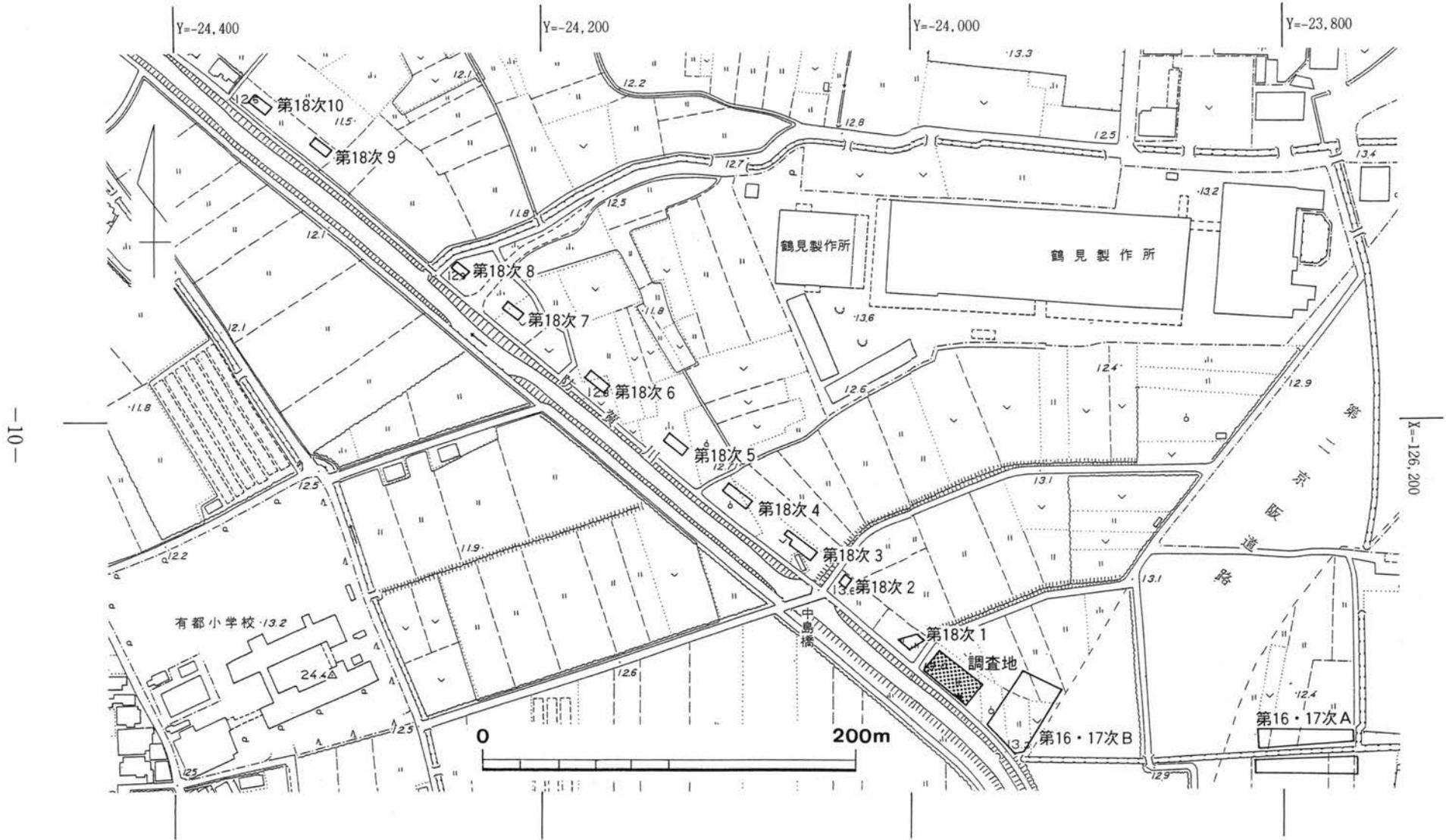
古墳時代前期から中期にかけては男山丘陵周辺に石不動古墳・茶白山古墳・西車塚古墳・東車塚古墳などの前方後円墳、前方後方墳が築造される。また、ヒル塚古墳は粘土槨を内部主体とし、方格規矩鏡や武器類を副葬する。後期には、横穴墓が美濃山丘陵を中心に多数営まれる。狐谷横穴群・女谷横穴群・荒坂横穴群などである。女谷横穴群からは鉄地金銅貼の胡録金具が出土している。古墳時代の集落跡としては、木津川河床遺跡・内里八丁遺跡・女郎花遺跡などがある。

古代の遺跡としては、志水廃寺・西山廃寺・美濃山廃寺などの寺院跡があげられる。志水廃



- | | | | |
|------------------|-------------|-----------------|------------|
| 1. 盛土 | 2. 暗灰茶色砂質土 | 3. 暗灰色砂質シルト(耕土) | 4. 茶灰褐色砂質土 |
| 5. 暗灰茶色土 | 6. 濃茶黄色土 | 7. 暗灰茶色土 | 8. 灰茶色土 |
| 9. 茶灰褐色土 | 10. 淡橙茶色土 | 11. 淡褐色土 | 12. 淡茶灰色土 |
| 13. 暗茶灰色土 | 14. 濃茶灰色土 | 15. 茶褐色土 | 16. 淡茶灰黄色土 |
| 17. 淡灰橙色砂質土 | 18. 灰色砂質土 | 19. 淡橙灰色細砂質土 | 20. 淡茶褐色土 |
| 21. 淡黒茶色土 | 22. 黄茶褐色土 | 23. 灰青色砂質シルト | 24. 明黄茶褐色土 |
| 25. 淡黄茶色土(S K18) | 26. 淡灰青色シルト | | |

第8図 調査地断面図(東壁、部分)



第9図 トレンチ配置図

寺・西山廃寺では、堂塔跡や瓦窯が確認され、7世紀後半から末頃の創建と考えられている。美濃山廃寺では、瓦が出土しているが、寺院に関連する明確な遺構は確認されていない。集落跡としては、内里八丁遺跡・上奈良遺跡・女郎花遺跡・荒坂遺跡などがある。内里八丁遺跡では瓦が出土しており、その性格が注目される。また、古山陰道の側溝かと考えられる溝も検出されているが、第17次調査の結果から再検討が必要との見方もある。上奈良遺跡は、『延喜式』に記載されている「奈良園」の候補地とみられており、則天文字などを記した墨書土器が出土している。生産遺跡としては、四天王寺の創建瓦を焼成した平野山瓦窯跡がある。また、平安時代初期には木津川に面した男山丘陵北側の頂部に、石清水八幡宮が勧請される。

中世の遺跡としては、内里八丁遺跡・上奈良遺跡・上津屋遺跡などがある。内里八丁遺跡では掘立柱建物跡や井戸跡などが確認されている。上奈良遺跡では、中世の井戸跡から木造仏座像の膝部が出土している。また、この地域独特の景観となっている島島が中世頃に形成されたと考えられている。

3. 調査内容

今回の調査では、古墳時代前期頃から近世にかけての遺構を検出した。しかし、今回の調査地内では遺構の残存している可能性の高い島島部がわずかしか該当しておらず、ほとんどが水田部である。特に西半部は、中世頃から近世にかけての水田と考えられるシルト層が10層前後堆積しており、顕著な遺構は検出していない。主に遺構を検出したのは、中央部で確認した島島北西隅部と、東側で確認した島島西辺の一部である。仮に、前者を島島1、後者を島島2とする。

①近世の遺構

主に島島1で検出した。島島2は、重機掘削の段階でやや深く掘り下げており、残存していない。検出面は、ほぼ標高11.8m前後である。検出したのは、東西方向および南北方向にのびる素掘りの溝やピットなどである。溝は幅約0.2～0.5m、深さ約0.1～0.2mを測り、耕作に伴うものとみられる。ピットには列状に並ぶものがあるが、浅く、建物としてまとまるものではない。これも耕作に伴うものか。この面で検出した遺構は、出土遺物からみて、近世でも前半に属するものとみられる。

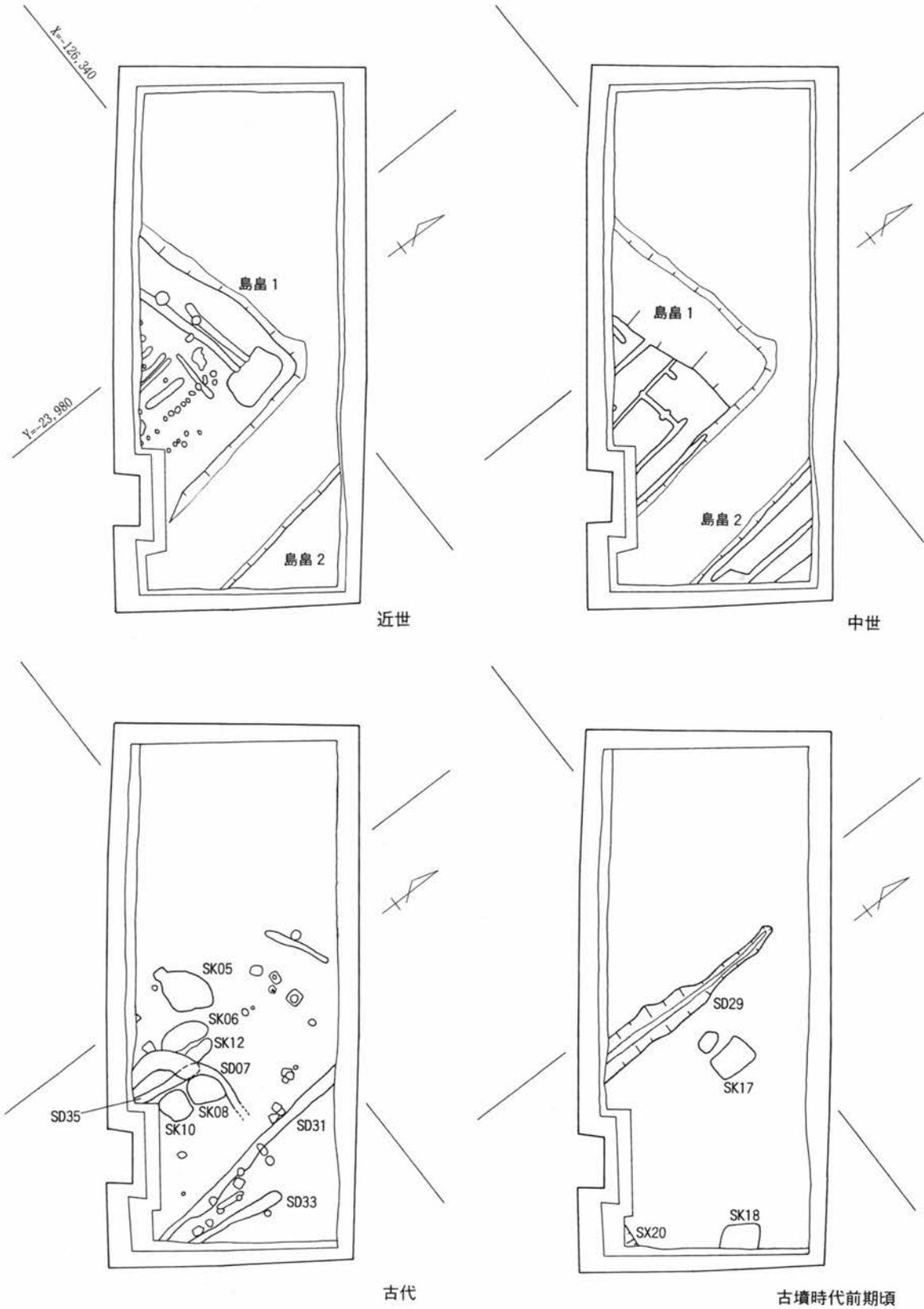
②中世の遺構

この時期の遺構は、主に東西および南北方向の素掘りの溝群である。島島1で検出したものは幅が狭く、約0.2～0.3mを測る。島島2で検出したものは、東西方向で、幅約1～1.3mを測る広めのものである。これらの溝は耕作に伴うものとみられ、この時期には耕作地であったものと考えられる。検出面は、標高約11.7m前後である。

③古代の遺構

この時期の遺構は、土坑、溝、ピットなどである。調査地中央に密集している。検出面は、標高約11.4m前後である。

溝 S D 07 幅約0.4～1mの溝で深さ約0.2～0.4mを測る。南側から弧状に屈曲して東側にの



第10図 トレンチ平面図

びる。須恵器、土師器が出土した。

溝S D 33 調査地東側で検出した。幅約0.6m、深さ約0.2mを測る溝で、ほぼ南北方向にのびる。

溝S D 35 溝S D 07の下部から検出した。幅約0.7m、深さ約0.5mを測る溝で、ほぼ南北方向にのびる。底部から多数の土師器、須恵器が出土した。

土坑S K 05 いびつな楕円形状を呈し、東西方向に長軸をもつ。長軸約3.6m、短軸約2.2m、深さ約0.3mを測る。

土坑S K 06 長楕円形を呈し、南北方向からやや東側に傾いた長軸をもつ。南側を溝S D 07に切られている。長軸約2.8m、短軸約1.2m、深さ約0.2mを測る。

この時期の遺構出土の須恵器杯蓋はすべて内面に返りをもっており、これらの遺構は7世紀頃に営まれたものと考えられる。また、埋土には焼土や炭が多量に含まれている。なお、これらの遺構の性格については不明である。

④古墳時代前期頃の遺構

この時期の遺構には、溝、土坑などがある。調査地南半部にまばらに分布する。検出面は、標高約11.1～11.3mである。

溝S D 29 調査地ほぼ中央で検出した。幅約0.6～1.6m、深さ約0.3～0.8mを測り、断面は逆台形状である。ほぼ南北方向にのびる。土師器が出土した。

土坑S K 18 調査地南東側で検出した。方形の土坑であるが、調査地外にのびるため、全容は不明である。一辺約2.1m、深さ約0.3mを測る。遺物は出土していないが、検出面から、この時期に属するものと考えられる。

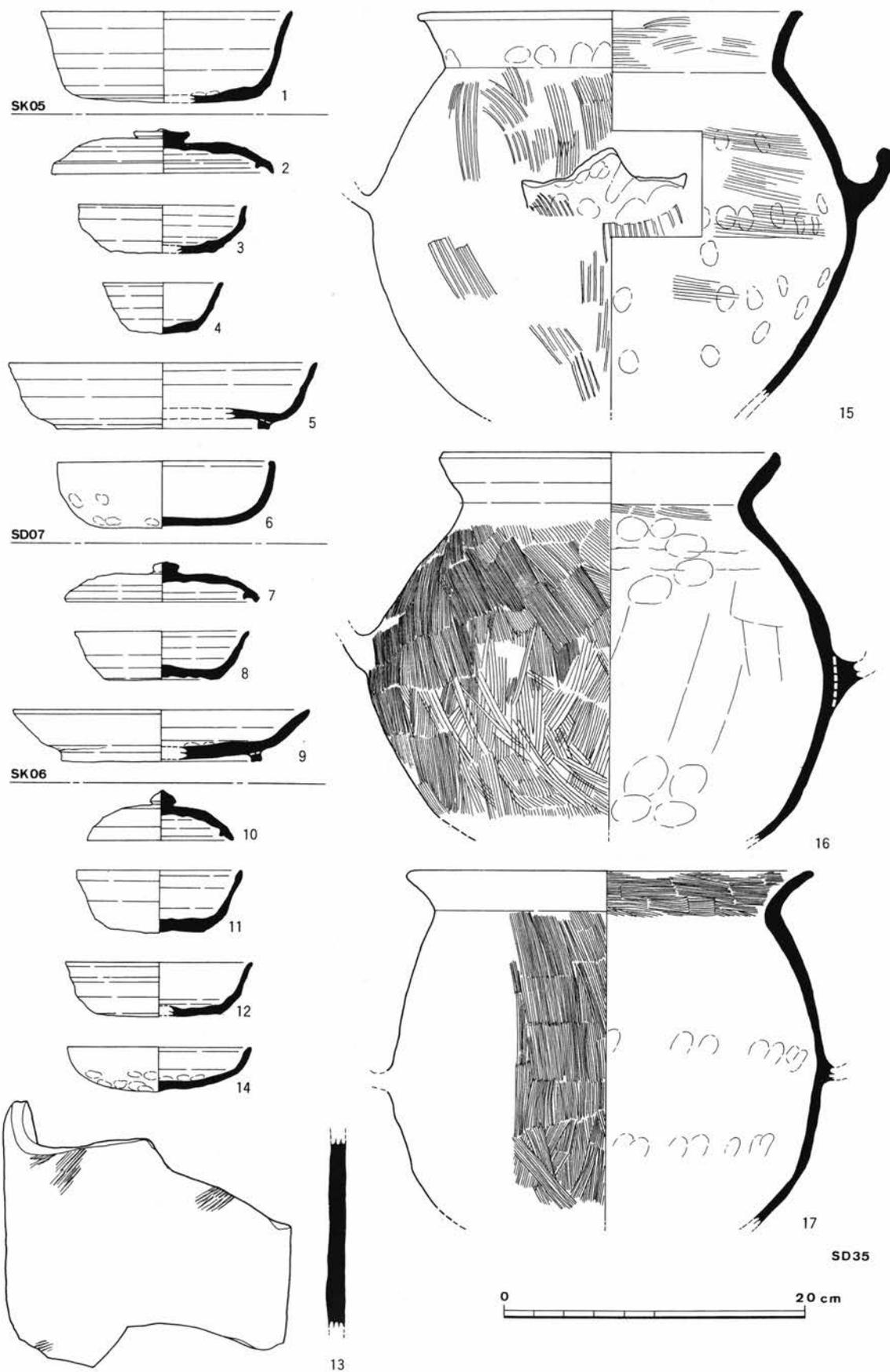
不明遺構S X 20 調査地南隅部で検出した。南側に落ち込むが、部分的な検出であり、その性格は不明である。土師器小形丸底壺片が出土した。

4. 出土遺物 (第11～13図)

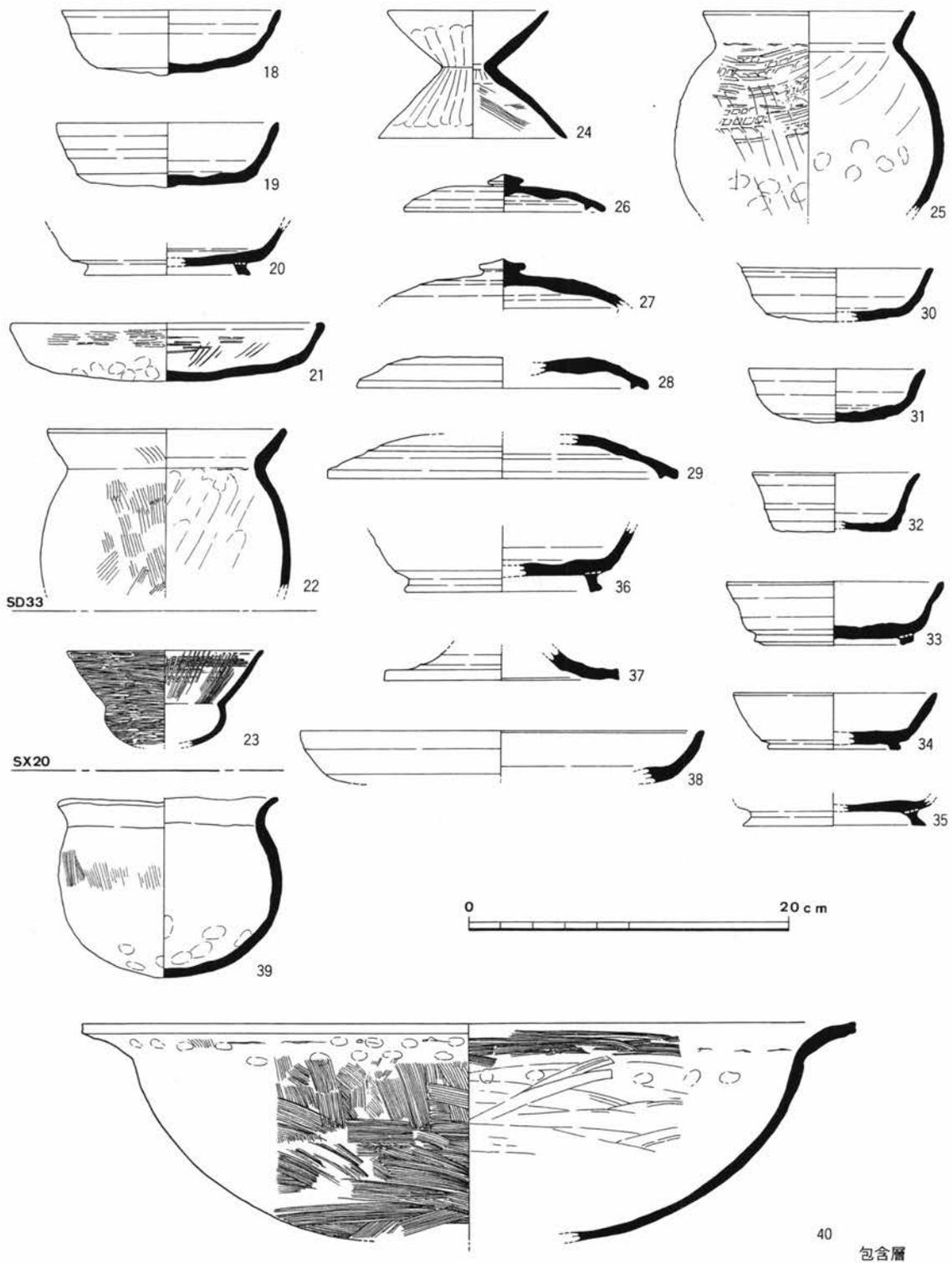
今回の調査で出土した遺物は、古墳時代前期を中心とする時期から近世に及ぶ。ただ、古墳時代中期から後期にかけての遺物は皆無に近い。また、古代の遺物も8世紀以降は目立たない。中世の遺物も、これまでの調査に較べると少ない。今回の調査で出土した遺物の主なものは、7世紀頃のものと同墳時代前期頃のものである。

1は土坑S K 05出土の須恵器杯である。口径16.5cmを測る。外面底部はヘラケズリされており、あるいは壺などの蓋か。

2～6は溝S D 07出土遺物である。2は、扁平な宝珠形のつまみをもつ須恵器杯蓋で、内面口縁端部に返りをもつ。口径14.7cm、器高2.9cmを測る。3は、口縁部が屈曲して上に立ち上がる須恵器杯であり、口縁端部がやや外反する。口径11.2cmを測る。4は、小形の須恵器杯で、底部から口縁部がほぼ直線的に斜め上に立ち上がる。5は、底部に貼り付け高台をもつ須恵器杯で、高台は底部やや内側に付けられる。口径20.4cm、器高4.5cm、高台径12.6cmを測る。6は、土師器杯で、口縁端部内側がやや肥厚し玉縁状になる。口径14.4cm、器高4.3cmを測る。

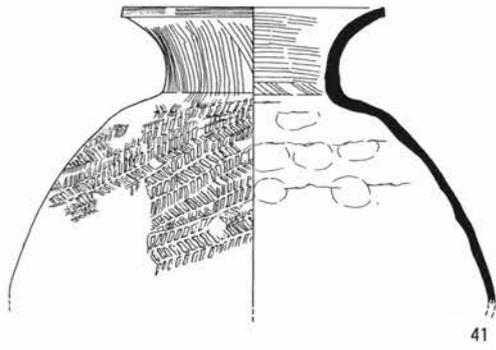


第11図 出土遺物実測図(1)

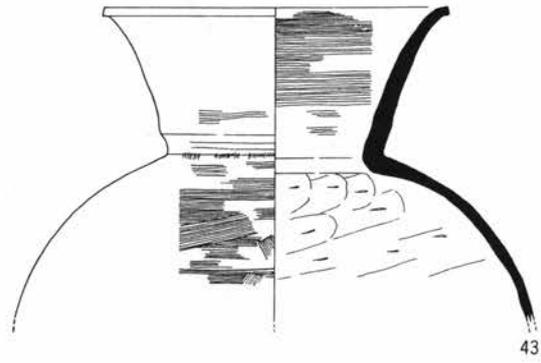


第12図 出土遺物実測図(2)

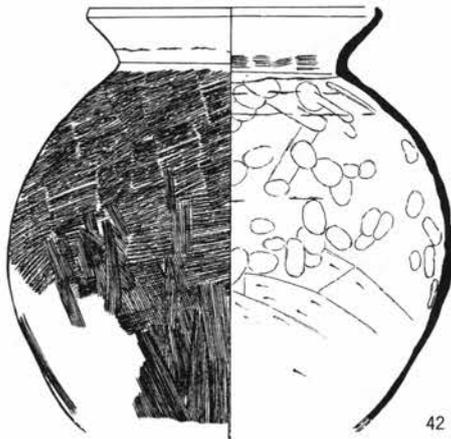
7～9は土坑S K06出土遺物である。7は、宝珠形つまみをもつ須恵器杯蓋で、内面口縁端部に返りをもつ。口径12.8cm、器高2.7cmを測る。8は、やや腰の張った器形の須恵器杯であり、口径11.6cm、器高3.2cmを測る。9は、高台付きの須恵器皿とみられ、やや開き気味の器形である。高台は底部やや内側に付けられる。口径19.6cm、器高3.4cm、高台径11.8cmを測る。



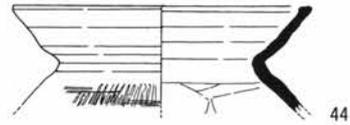
41



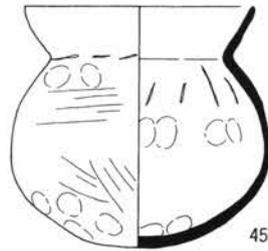
43



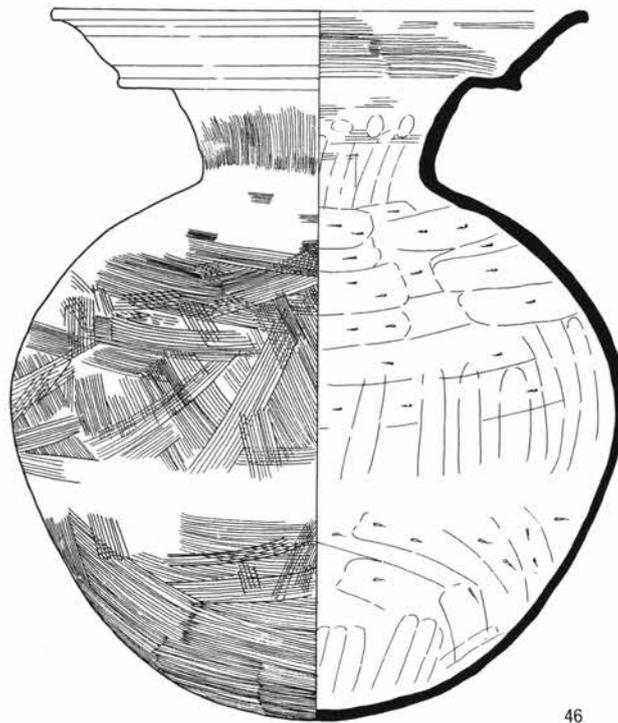
42



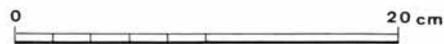
44



45



46



SD29

第13図 出土遺物実測図(3)

10～17は、溝S D35出土遺物である。10は、宝珠形つまみ付きの小形の須恵器杯蓋である。天井部は丸味をもつ。口径9.8cm、器高3.5cmを測る。11・12は、やや腰の張った器形の須恵器杯である。11は口径11cm、器高4.1cm、12は口径12.4cmを測る。13は、筒形の器形を呈する須恵器であるが、全容は不明である。径約19cmを測る。14は、浅い器形の土師器杯とみられ、口縁部はナデ調整である。口径12.3cm、器高3cmを測る。15～17は、三角形気味の扁平な把手をもつ土師器甕である。外面はハケメ調整される。口径は、15が25.5cm、16が22.1cm、17が26.7cmを測る。器高はいずれも底部が残存していないので不明である。

18～22は、溝S D33出土遺物である。18・19は、ほぼ同寸の須恵器杯で、口縁部が斜め上方に立ち上がる。18は口径13.7cm、器高4cm、19は口径13.7cm、器高4.1cmを測る。20は、高台付きの須恵器杯で、高台は底部内側に付く。高台径10.4cmを測る。21は、土師器皿であり、口縁端部内側がやや肥厚して玉縁状になる。磨滅のため調整の詳細は不明であるが、内外面ともにミガキ調整で、内面には放射状の暗文を施している様子である。口径19.4cm、器高3.6cmを測る。22は、土師器甕で、内面ナデ、外面ハケメ調整である。口径14.8cmを測る。

23は、不明遺構S X 20出土の土師器小形丸底壺である。外面は横方向のミガキ調整、内面口縁部は横方向のミガキ調整の後、縦方向に放射状のミガキを施す。口径12.2cmを測る。

41～46は、溝S D29出土遺物である。41は、弥生系の壺である。体部外面に矢羽状のタタキを施す。外面頸部には縦方向のハケメ、内面口縁部には横方向のハケメがみられる。口縁端部は面をもち、浅く細い沈線が2条めぐる。口径13.6cmを測る。42は、庄内式の甕である。体部外面に細かいタタキを施す。内面は、下半がヘラケズリで上半には指押さえの痕跡が残る。口縁端部は上方に摘み上げる。口径14.9cmを測る。43は、土師器壺で、口縁部は外反気味に高く立ち上がる。体部外面はハケメ調整、内面は屈曲部付近までヘラケズリされる。口径18cmを測る。44は土師器甕である。口縁端部を折り返して肥厚させる。体部内面は屈曲部付近までヘラケズリされる。口径15.4cmを測る。45は、土師器の小形甕である。口縁部がほぼ直線的に斜め上方に立ち上がる。口径12cm、器高12.6cmを測る。46は、土師器二重口縁壺である。外面ハケメ調整、内面は頸部付近までヘラケズリされる。口径27.7cm、復原高37.5cmを測る。

24～40は包含層出土遺物である。24は、土師器器台である。調整は磨滅のため詳細は不明であるが、外面はケズリ後ナデ調整、脚部内面はハケメ調整とみられる。口径9.8cm、脚部径11.8cm、器高7.9cmを測る。25は、弥生系の甕である。体部外面に矢羽状のタタキを施す。口径13.2cmを測る。26～29は、須恵器杯蓋である。いずれも内面口縁端部に返りをもつ。26は口径12.4cm、器高2.4cm、28は口径18.2cm、29は口径21.8cmを測る。30～32は、須恵器杯である。30は口径11.8cm、31は口径11cm、器高3.4cm、32は口径10.3cm、器高3.7cmを測る。33～36は、高台付きの須恵器杯である。33は口径13.5cm、器高3.4cm、高台径9.8cm、34は口径12.6cm、器高3.5cm、高台径8.4cm、35は高台径11.4cm、36は高台径11.9cmを測る。37は、須恵器高杯の脚部である。脚部径14.6cmを測る。38は須恵器皿とみられる。口径25cmを測る。39は土師器甕である。口縁部は丸味をもって屈曲する。外面にハケメが残る。口径13.8cm、器高11.2cmを測る。40は土師器鍋で

ある。外面ハケメ調整、口縁部内側もハケメ調整である。口径48cmを測る。

5. 小 結

今回の調査では、近世から古墳時代前期を中心とする時期にかけての遺構を検出した。中世およびそれ以降は、農業関係と考えられる遺構が主であり、その時期には耕作地となっていたものと考えられる。

7世紀頃の遺構と考えられるものは調査地中央部付近に集中している。これは、周囲が島畠造成で削平されてしまったためとも考えられる。これらの遺構は、比較的短期間の内に次々と営まれたものとみられる。遺構の性格は不明と言うしかないが、それらの遺構出土遺物は、その時期の土器の様相を知る良好な資料と言えよう。

古墳時代前期頃の遺構は溝などのみで、竪穴式住居跡などはなく、集落の中心部の様相はみられない。あるいは、調査地付近はその頃の集落の縁辺部付近に当たるものとみられる。

(引原茂治)

注1 調査参加者 岡野和美・柴田文恵・藤原美奈子・田中希和・藤原悟

注2 石尾政信・石崎善久「内里八丁遺跡第16・17次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第103冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002



第14図 調査作業風景

3. 関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡 平成14年度発掘調査概要

はじめに

関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡の発掘調査は、都市基盤整備公団の依頼を受けて継続して実施しているものである。平成14年度は、赤ヶ平遺跡、片山古墳群、内田山遺跡・内田山古墳群の3地点4遺跡について調査を実施した。

赤ヶ平遺跡は、京都府相楽郡木津町大字木津小字赤ヶ平に所在する。赤ヶ平遺跡の調査は、昭和59年度に第1次調査、平成13年度に第2次調査を実施している^(注1)。今回の調査は第3次調査に当たり、第2次調査で多数の遺構が検出された調査区の南北両隣接地を対象として実施した。調査期間は、平成14年6月4日から10月10日までである。調査面積は約800㎡である。

片山古墳群は、同町大字木津小字片山に所在する。今回の調査地は、平成12年度に実施した木津城山遺跡の試掘調査地からさらに北へのびる丘陵尾根部に当たる。調査期間は、平成14年10月28日から平成15年1月20日までである。調査面積は330㎡である。

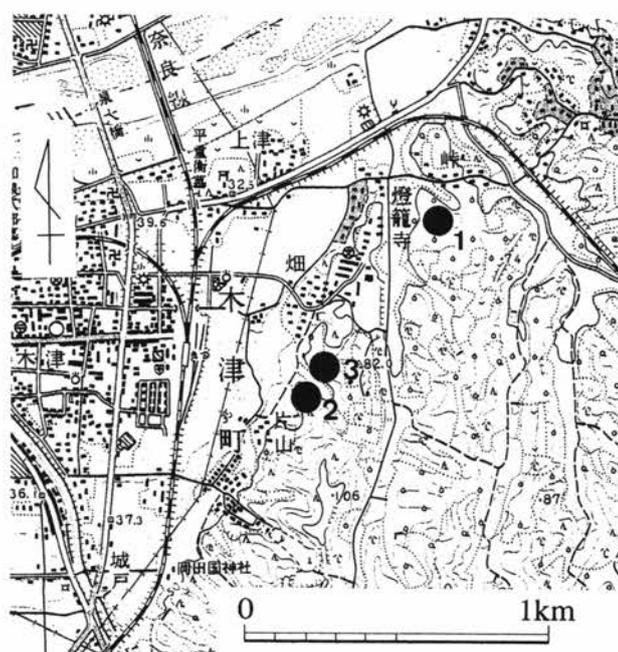
内田山遺跡・内田山古墳群は、同町大字木津小字内田山に所在する。内田山遺跡・内田山古墳群の調査は、平成11年度に第1次調査、平成12年度に第2次調査を実施している^(注2)。今回の調査は第3次調査に当たり、第1次調査地の南西側の斜面地に位置する。調査期間は、平成15年1月21日から2月27日までである。調査面積は170㎡である。

発掘調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長伊野近富、同調査員筒井崇史が担当し、発掘調査および整理作業には多くの調査補助員・整理員の参加・協力をいただいた^(注3)。

本概要報告は筒井が執筆した。

調査期間中は、京都府教育委員会・木津町教育委員会・京都府立山城郷土資料館・木津の緑と文化財を守る会・京都府立木津高等学校などの関係諸機関からご教示・ご協力をいただいた。

なお、調査に係る経費は、全額、都市基盤整備公団が負担した。



第15図 調査地位置図(国土地理院1/25,000奈良)

1. 赤ヶ平遺跡
2. 片山古墳群
3. 内田山遺跡・内田山古墳群

(1) ^{あかがひら}赤ヶ平遺跡 (第3次)

1. 調査の経過

調査地は、木津町東部の丘陵部に所在する。調査地周辺は、畑や京都府立木津高等学校の実習農園などが営まれており、今回の調査地点ももともとは畑であった。

今回の調査は、第2次調査の成果を受けて、第2次調査の第1・2トレンチの北側に調査区(第1トレンチ)を設定するとともに、その南側については、まず試掘調査を行い(第2～5トレンチ)、その結果を受けて調査区の調査範囲の確定をすることとした。また、第2次調査の際に遺跡の南辺で行った試掘調査のさらに西側の地点にも調査区(第6トレンチ)を設けた(第16図)。

発掘調査は、まず第1トレンチから着手した。



第16図 赤ヶ平遺跡トレンチ配置図

平成14年6月5日から重機による表土掘削を行い、その後、人力による精査、遺構の掘削を行った。

第2～5トレンチは、平成14年7月3日から重機掘削による表土掘削を行ったのち、人力による精査などを行った。その結果、弥生時代の土坑や時期不明の木棺墓、中世と思われる溝などを検出した。この調査結果を受けて調査地の東半に当たる第3、第4、第5トレンチに囲まれた範囲を拡張し、さらに調査を行った。面的な調査は、平成14年8月5日から重機による表土掘削を行ったのち、人力による精査、遺構の掘削を行った。

第6トレンチは、平成14年9月9日から人力による表土掘削を行い、引き続き遺構検出、遺構掘削作業、記録作業

を行った。

遺構の掘削作業が概ね終了した時点で、平成14年10月4日にはラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。また、調査成果が概ね明らかとなった平成14年9月27日には関係者説明会を実施した。10月10日には、すべての現地作業を終了した。

なお、赤ヶ平遺跡で出土した前期弥生土器の胎土分析とサヌカイトの石材産地分析を付載報告として掲載した。合わせて参照されたい。

2. 調査の概要

①第1トレンチ(第17図)

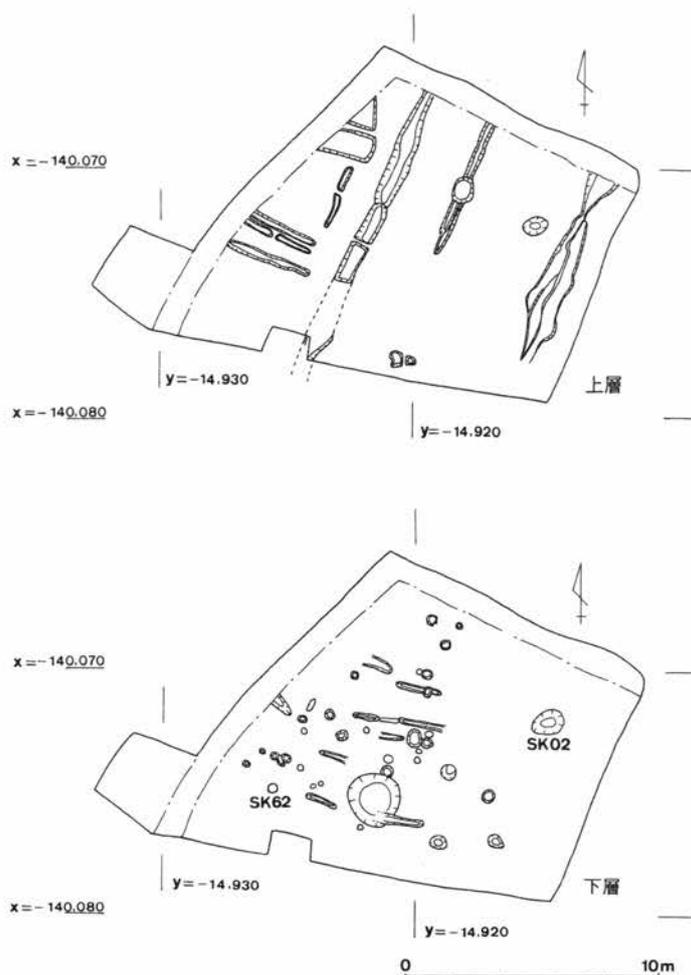
現状では耕地化のためほぼ平坦な地形であるが、本来は北に向かってゆるやかに傾斜するような地形を呈している。調査の結果、中世と弥生時代の遺物包含層を確認し、遺構としては土坑・柱穴などを検出した。遺構は、遺物包含層を挟んで、上層検出分と下層検出分とがあるが、包含層が非常に薄く、また、調査区全体には広がらないため、遺構の帰属層位は不明なものが多い。また、遺構から出土する遺物もほとんどないため、時期の不明なものが多い。第1トレンチの主要な遺構は以下のとおりである。

土坑SK02 第1トレンチの北東隅付近で検出した。平面形は、やや不整形な長楕円形を呈し、長軸長1.3m、短軸長0.9m、深さ0.3mを測る。埋土は、下層が黒褐色粘質土、上層が黄灰色砂質土である。出土遺物はなく、時期は不明である。

土坑SK62 第1トレンチの南西隅付近で検出した。ほぼ円形を呈する小規模な土坑と思われるが、掘形はやや不明瞭であった。直径0.5m前後、深さ0.15m程度を測る。出土した土器は、磨滅が著しく詳細な時期は不明であるが、弥生土器と思われる。

②第2～5トレンチ(第18図)

現状では、第1トレンチと同様に耕地化のためほぼ平坦な地形を呈していた。調査は、まず試掘調査を行って、調査範囲の確定をすることとした。試掘調査は、第2～5トレン

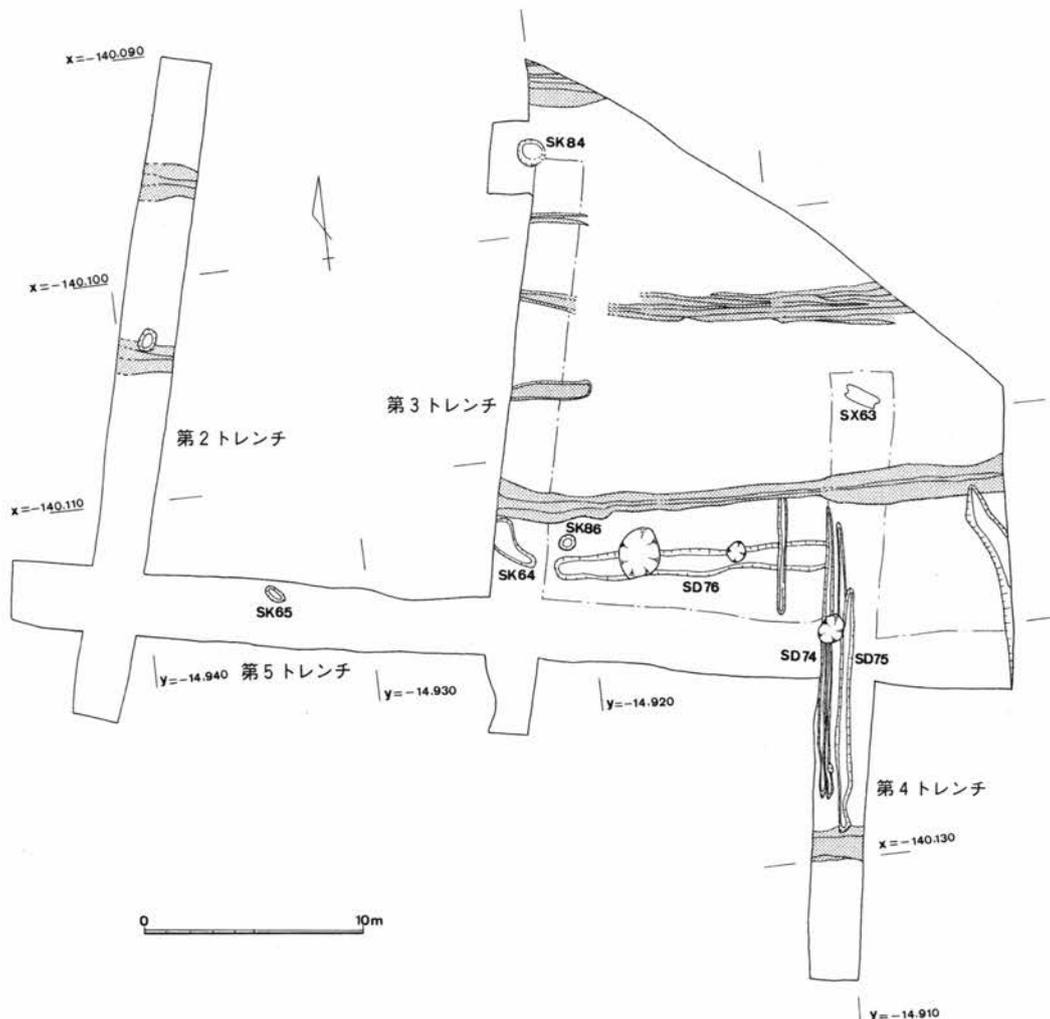


第17図 赤ヶ平遺跡第1トレンチ遺構配置図

チを設定して実施した。その結果、弥生時代の土坑や時期不明の木棺墓、中世と思われる溝などを検出した。この調査結果を受けて調査対象地の東半部について面的な調査を行った。しかし、溝1条や土坑1基を除いて、顕著な遺構は確認されなかった。第3～5トレンチ、ならびに本調査で検出した主要な遺構は以下のとおりである。なお、第2トレンチでは、顕著な遺構・遺物は検出されなかったが、弥生土器の小片が2、3点出土した。

土坑 S K 64 第3トレンチと第5トレンチの交差する付近で検出した。遺構の西辺は調査区外に広がるため、全体の形状は不確定であるが、平面形は「L」字状を呈すると考えられる。非常に浅く遺存状況は良好とは言えない。当初は土坑と考えていたが、第4トレンチの東側を面的に拡張した際に検出した溝 S D 76の延長上に位置することから、溝 S D 76が東からのびてきて、北におれるコーナー部分に相当するのではないかと考えられる。遺物としては、須恵器片とサヌカイト製の石核が出土した。

木棺墓 S X 63(第19図) 第4トレンチ北端で検出した。木棺墓 S X 63は、全長1.47m、幅0.65m、深さ0.17mを測るやや小規模な墓壇に、組み合わせ式木棺を納めた墓である。木棺は全長1.47m、幅0.48m、内法の長さ1.07m、幅0.33mを測る。木棺の材は腐って遺存していなかった



第18図 赤ヶ平遺跡第2～5トレンチ遺構配置図

が、明瞭な土色の変化が認められた。棺材は灰黄色粘質土を呈していた。木棺内の埋土は、上層が茶黄色粘質土、下層が灰茶色粘質土である。木棺内からはサヌカイトの剥片が出土したが、副葬品とは考えられないため、詳しい時期は不明である。ただ、木棺痕跡の特徴から、弥生時代ないし古墳時代のものではないかと考えられる。

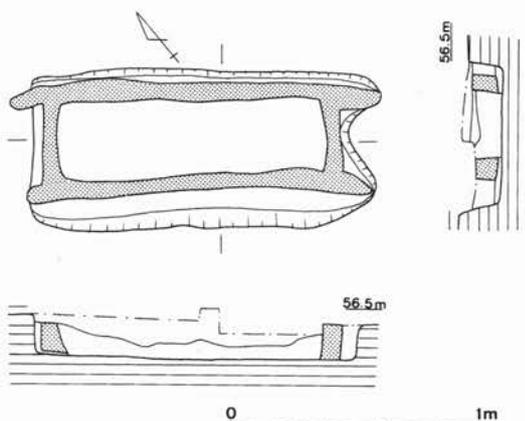
溝S D74・75 第4トレンチの南半で検出した。ともに南北方向にのびる溝で、ほぼ並行して検出した。溝S D74は全長12.5m、幅0.3~0.5m、深さ5~10cmを測る。溝S D75は全長11.9m、幅0.3~0.5m、深さ5~10cmを測る。溝S D74は2条の溝が重複していた。両溝が並行してのびることから、道状遺構の両側溝である可能性がある。両溝の心々間距離は0.9~1.1mを測る。溝からは土師器や瓦器の小片が出土しており、正確な時期は不明であるが、中世の遺構と考えられる。なお、両溝の北への延長部分には第2次調査で検出した鏡埋納土坑S X41があり、これとの関連が考えられる。

土坑S K65 第2トレンチと第5トレンチの交差点から東へ約6mの地点で検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸長1.1m、短軸長0.6m、深さ0.1mを測る。埋土は黄茶色粘質土である。遺物としては、少量の弥生土器と思われる土器片が出土したにとどまる。

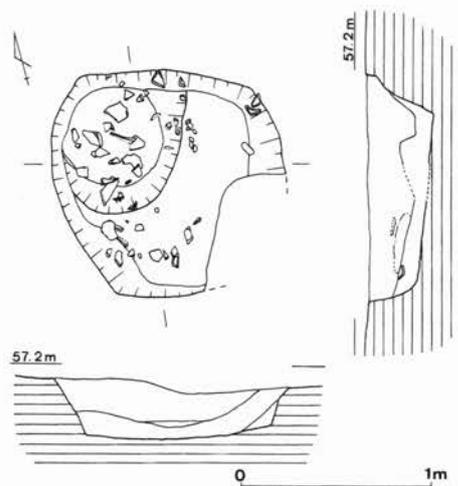
以下は、本調査で検出した遺構である。

溝S D76 調査区の南辺で検出した。溝S D74・75とはほぼ直交する溝で、溝S D74・75よりも新しい。この交差点よりも東側は削平のため検出できなかった。検出長11.4m、幅1~1.3m、深さ5~10cmを測る。前述のように、土坑S K64が溝S D76の延長部とすれば、調査区南西端付近ではほぼ直角に屈曲していると考えることができ、何らかの区画溝であった可能性がある。遺物は、埋土からわずかな土器片が出土したのみで、詳しい時期は不明である。溝自体の残りがわずかなので、調査地周辺が著しく削平されていると考えられる。

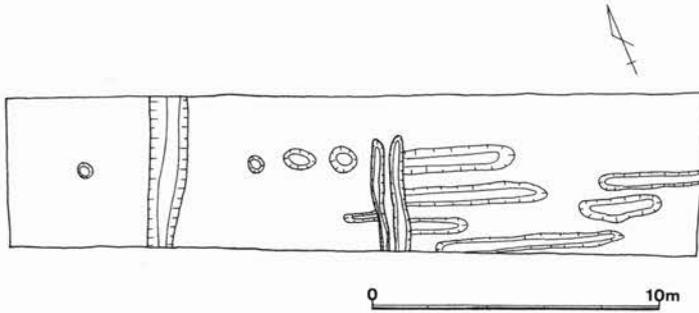
土坑S K84(第20図) 調査区の北西隅で検出した。平面形は、ほぼ円形を呈する。直径1.2m前後、深さ0.25~0.35mを測る。埋土は、上層が茶黄色砂質土、下層が灰茶色砂質土である。土坑内からは、瓦質土器の火鉢が、ややまとまって出土した(第23図15・16)。時期は中世と考えられる。



第19図 赤ヶ平遺跡木棺墓S X63実測図



第20図 赤ヶ平遺跡土坑S K84実測図



第21図 赤ヶ平遺跡第6トレンチ遺構配置図

③第6トレンチ(第21図)

第2次調査の際に遺跡の南辺で行った試掘調査地のさらに西側に位置する調査区である。調査トレンチは長辺13m、短辺3mの矩形を呈する。調査の結果、近・現代の耕作に伴う溝や地境溝などのほか、時期不明の土坑などを検出した。

出土遺物は近世以降のものがほとんどであった。

3. 出土遺物

出土遺物としては、弥生土器壺・甕、須恵器、土師器、瓦器、磁器片、陶器片、石器剥片などがある(第22・23図)。大半は小片で、全体の形状などを知ることができるものはほとんどない。

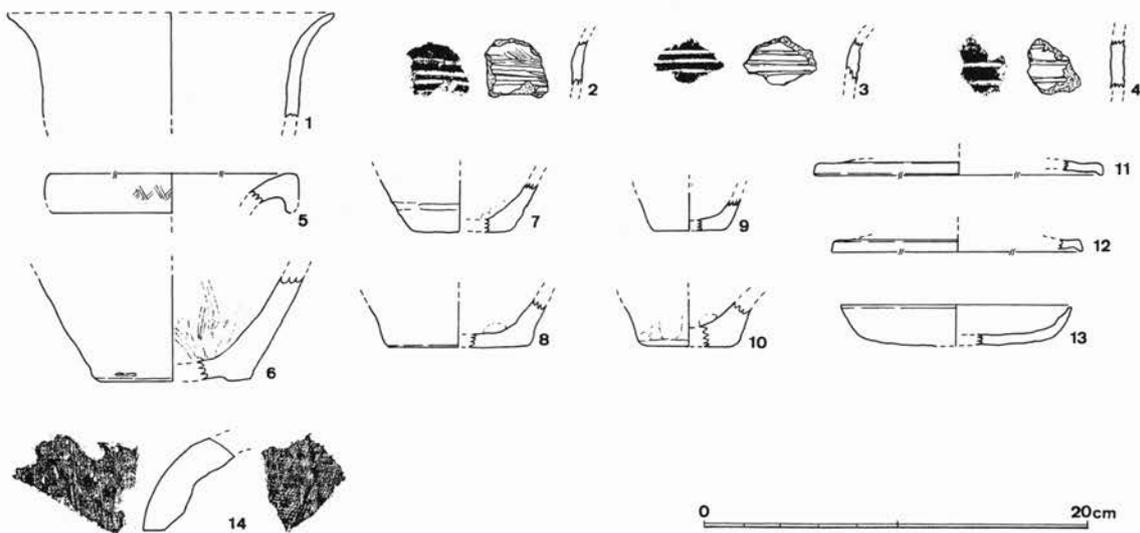
弥生土器(1~10) いずれも第1トレンチの遺物包含層から出土したもので、遺構に伴うものはない。1は広口の甕、2~4は外面に沈線を有する破片である。5は広口壺の口縁部の破片である。6~10は底部である。1~4・6~9は弥生時代前期、5・10は同後期のものと思われる。6は中期の可能性もある。

須恵器(11・12) いずれも杯蓋の小破片である。奈良時代のものと思われる。

土師器(13) 本調査の際に出土した。土師皿である。中世のものと思われる。

瓦(14) 土坑S K86から出土した。丸瓦の一部と思われる。外面はケズリ調整を施す。内面には布目の圧痕がみられる。

瓦質土器(第23図15・16) 土坑S K84から出土した。火鉢と思われる。同一個体と思われる。口径44.8cm、底径38cmを測る。



第22図 赤ヶ平遺跡出土遺物実測図(1)

石器(図版第25-17・18) 17は土坑S K64から出土した。サヌカイト製の石核と思われる。18はサヌカイト製の剥片である。

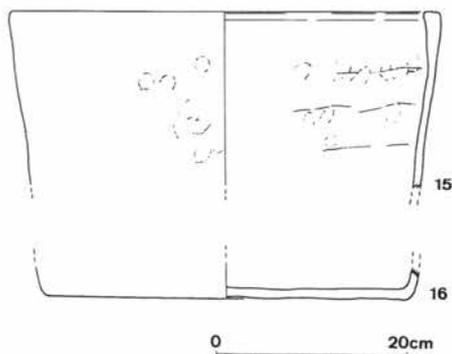
4. まとめ

今回の調査成果については、以下のとおりである。

まず第1トレンチでは、顕著な遺構は認められなかったが、薄いながらも遺物包含層を確認したことから、調査地周辺における土地の利用状況の一端を知ることができた。

第2～5トレンチでは、その東半部について面的な調査を実施したが、顕著な遺構はほとんど検出されなかった。これは開墾などによって、本来の遺構面が著しく削平されたものと考えられる。ただ、今回、面的な調査に至らなかった西半部では、第2トレンチで弥生土器片が出土したことや、第5トレンチで土坑S K65を検出したこと、土坑S K64の北への延長部が調査区外へ伸びる可能性があることなどから、弥生時代または中世の遺構が遺存する可能性がある。また、第1トレンチも含めて少量ながら奈良時代の遺物が出土していることから、調査地周辺に当該期の遺構が存在する可能性もある。

第6トレンチでは、時期不明の土坑などがあり、平成13年度の調査で検出された遺構と関連する可能性があるが、全体としては、遺構・遺物ともに希薄である。



第23図 赤ヶ平遺跡出土遺物実測図(2)

(2) ^{かたやま}片山古墳群

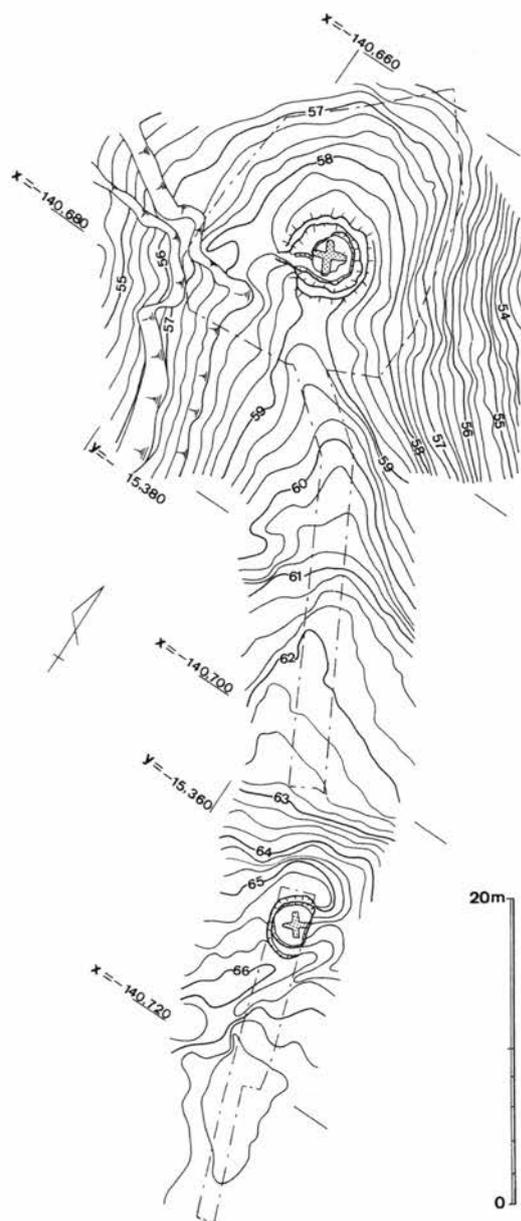
1. 調査の経過

調査地は、木津町東部に所在する丘陵から木津町市街地に向かって北西方向にのびる支尾根のほぼ先端に位置する。調査は、片山2号墳の全面調査と、その背後で確認された古墳状隆起の試掘調査を行った。

発掘調査は、平成14年10月28日から調査前の地形測量に着手し、11月5日からは人力による表土掘削・精査を行い、遺構の検出に努めた。しかし、調査の進展に伴い、片山2号墳は古墳でないことが判明した。また、片山2号墳以外の古墳状隆起も、いずれも古墳ではないことを確認した。現地調査は、平成15年1月20日に終了した。

2. 調査の概要

①片山2号墳(第24図) 『京都府遺跡地図』(1985年版)には、片山2号墳として登録されていたが、調査前の現状としては墳頂部中央に大規模な攪乱が認められた。調査は、表土掘削と並行



第24図 片山古墳群地形測量図

して、この攪乱部分の清掃を行った。この結果、墳頂部中央の攪乱(S X01)は、太平洋戦争中に設置された砲台陣地跡の可能性が高いと考えられた。また、墳丘と考えられたものの一部は、この時の盛土と判断された。この盛土を除去して、さらに遺構の検出に努めたが、古墳に関連する遺構・遺物はともに確認することはできなかった。以上の調査成果から片山2号墳として登録されていた古墳状隆起については、古墳ではないと判断するに至った。

このほか、集石遺構2か所(S X02・03)、土坑1基(S K04)などを検出したが、いずれも遺物を伴わないため、時期は不明である。

②試掘調査部分 人力による表土掘削を行い、その後、遺構の検出に努めた。しかし、顕著な遺構は検出されず、上記の砲台陣地跡と考えられる攪乱と同様のものを1か所(S X06)確認したのみである。

3. まとめ

片山2号墳ならびにその背後で確認された古墳状隆起は、いずれも古墳ではないことを確認した。また、周辺についても、時期不明の遺構があるものの、出土遺物はいずれも近・現代のものであり、近世以前にこの周辺で、大規模な土地利用が行われていた可能性はほとんどないと考えられる。

うちだやま (3)内田山遺跡・内田山古墳群(第3次)

1. 調査の経過

調査地は、木津町東部に所在する丘陵から木津町市街地に向かって西北西方向にのびる支尾根のほぼ先端部の南側斜面に位置する。

今年度の調査は、第1次調査の成果を受けて、第1次調査の第4トレンチの南側に調査区を2か所設定して実施した。調査は、第1・2次調査に引き続くものであり、調査区名は第6トレンチ、第7トレンチとした(第25図)。

発掘調査は、平成15年1月21日から重機による表土掘削を行い、その後、人力による精査、遺構の掘削を行った。調査区周辺は、内田山B1号墳の墳丘とその周溝が存在すると予想されているため、排土は、第5トレンチの東側まで搬出した。調査の結果、弥生時代の土坑や土器溜まりのほか、時期不明の溝、近・現代地境溝などを検出した。検出した遺構は、平板で略測を行いながら遺構番号をつけ、随時、遺構図の作成、写真撮影を行った。

遺構の検出・掘削作業、記録作業などが概ね終了した2月21日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。2月27日にはすべての現地作業を終了した。

2. 調査の概要

①第6トレンチ(第26図)

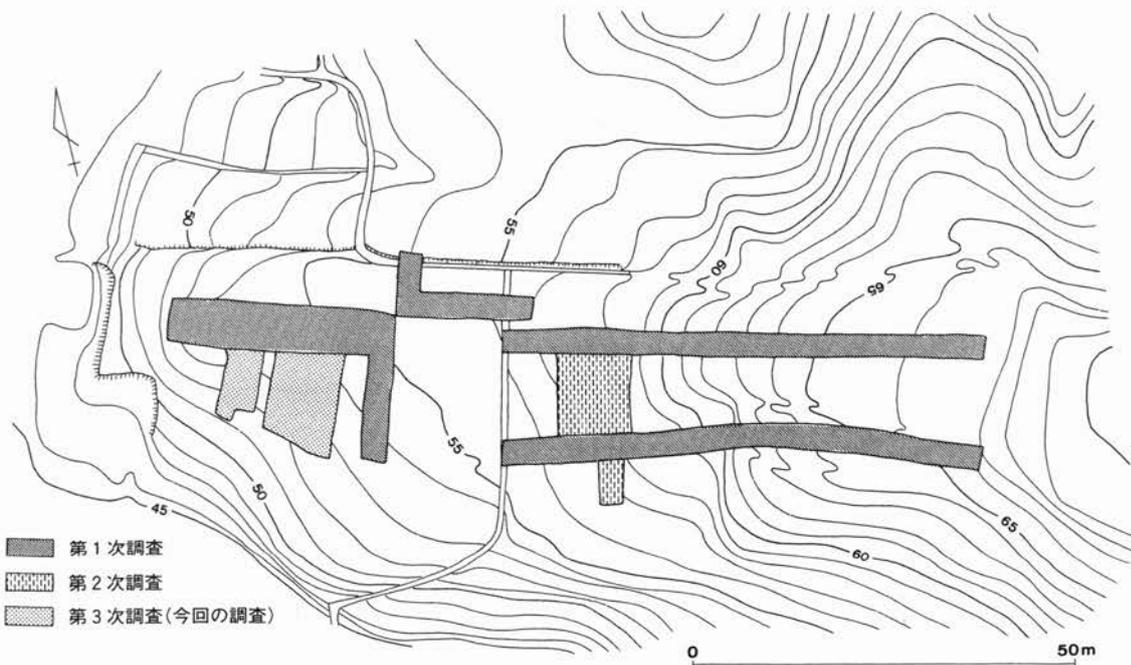
弥生時代と考えられる土坑2基(S K111・112)、土器溜まり1か所(S X113)のほか、時期不明の溝、近・現代の地境溝を多数検出した。遺物は遺構から弥生土器が出土したほか、表土層から中世以降の土師器や、内田山B1号墳に伴うと思われる埴輪片などが出土した。第6トレンチの主要な遺構は以下のとおりである。

土坑S K101 直径0.4m前後、深さ0.1m前後を測る円形の掘形内から弥生土器が出土した。

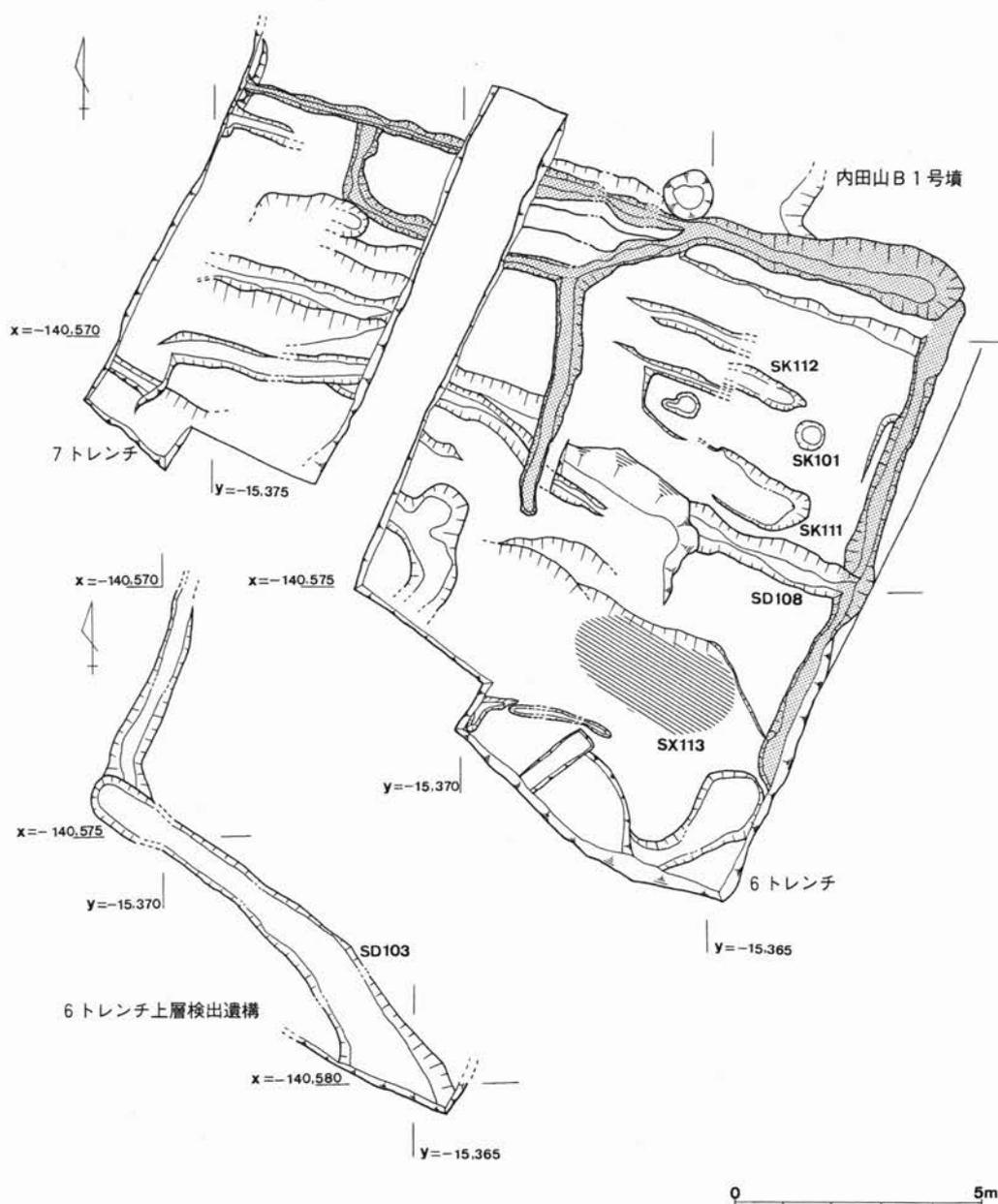
土坑S K111 全長2.1m、幅1.05m、深さ35cm前後を測る。出土遺物は弥生土器の小片が出土したのみである。出土した土器片は、いずれも細片であり、詳細な時期などを知ることはできなかった。

土坑S K112 全長1.7m、幅0.5m、深さ15～25cmを測る。出土遺物は、弥生土器片が多数出土したが、いずれも細片であり、詳細な時期は不明である。

土器溜まりS X113 南北2.5m、東西3mの範囲から多数の土器が出土した。土器溜まりS X



第25図 内田山遺跡・内田山古墳群トレンチ配置図



第26図 内田山遺跡・内田山古墳群第6・7トレンチ遺構配置図

113は明確な掘形を持たず、自然地形の落ち込みに多数の土器が丘陵上方から転落ないしは廃棄されたものが堆積したと考えられる。

内田山B1号墳 B1号墳の墳丘の東端角を検出したが、削平・攪乱が著しく、本来の形状は著しく損なわれているものと思われる。

②第7トレンチ(第26図)

時期不明の溝、もしくは近・現代の地境溝を検出したが、弥生時代の遺構・遺物は全く検出できなかった。また、表土層から、第6トレンチ同様、中世以降の土師器や内田山B1号墳に伴うと思われる埴輪片などが少量出土したが、これに関連する遺構は確認できなかった。

3. 出土遺物

出土遺物としては、弥生土器と埴輪が大半を占める(第27・28図)。このほか、中近世の土師器や陶磁器の小片が出土している。

①弥生土器

土器溜まりS X 113出土遺物(1～41)

1は外反する壺の口縁部である。2は長頸壺の頸部と思われる。3は口縁部を欠損するが広口壺などの頸部と思われる。4～7は頸部が「く」字状に屈曲する口縁部の甕である。いずれも口縁端部に面を有する。4は肩部に列点文を施す。8～10は受口状を呈する甕または壺である。10は口縁部外面に列点文を、肩部に直線文・波状文を施す。11～14は鉢である。11～13は大きさは異なるものの、いずれも口縁部が大きく外方に開くものである。12は底部と口縁部が残存するが、接合はしない。14は口縁部がやや肥厚する。内面はやや内湾気味で、端部は面をなす。15～25は底部である。26は有孔鉢の底部である。底部に直径約1cmの穿孔がある。27～29は高杯である。27は口縁端部を欠損するが、杯部外面に波状文を施す。28も口縁端部を欠損するが、杯部外面下半に3条の沈線が認められる。29は互いに接合しないが、胎土や焼成が類似することから同一個体と判断した。「ハ」字状に広がる脚部と、ミガキを施した杯部とからなる。30～36は、高杯脚部である。形態は多様で、34・36のように脚柱部外面に沈線が施されるものや、35のように柱状を呈するものなどもある。37～41は器台である。口縁部の形態は多様である。41は、ほぼ全形を知ることができる器台である。口縁部外面に2個一組の円形浮文を貼り付ける。また、体部に4段3方向計12個のスカシ孔が穿孔される。

そのほかの出土遺物(42～51)

42は土坑S X 101から出土した高杯である。磨滅が著しく、調整などは不明である。43は溝S D 103から出土した高杯脚部である。44は土坑S K 112から出土した高杯脚部である。45～51は第6トレンチの調査中に出土したもので、遺構には伴わない。45は高杯杯部、46・47は同脚部、48～51は同底部である。

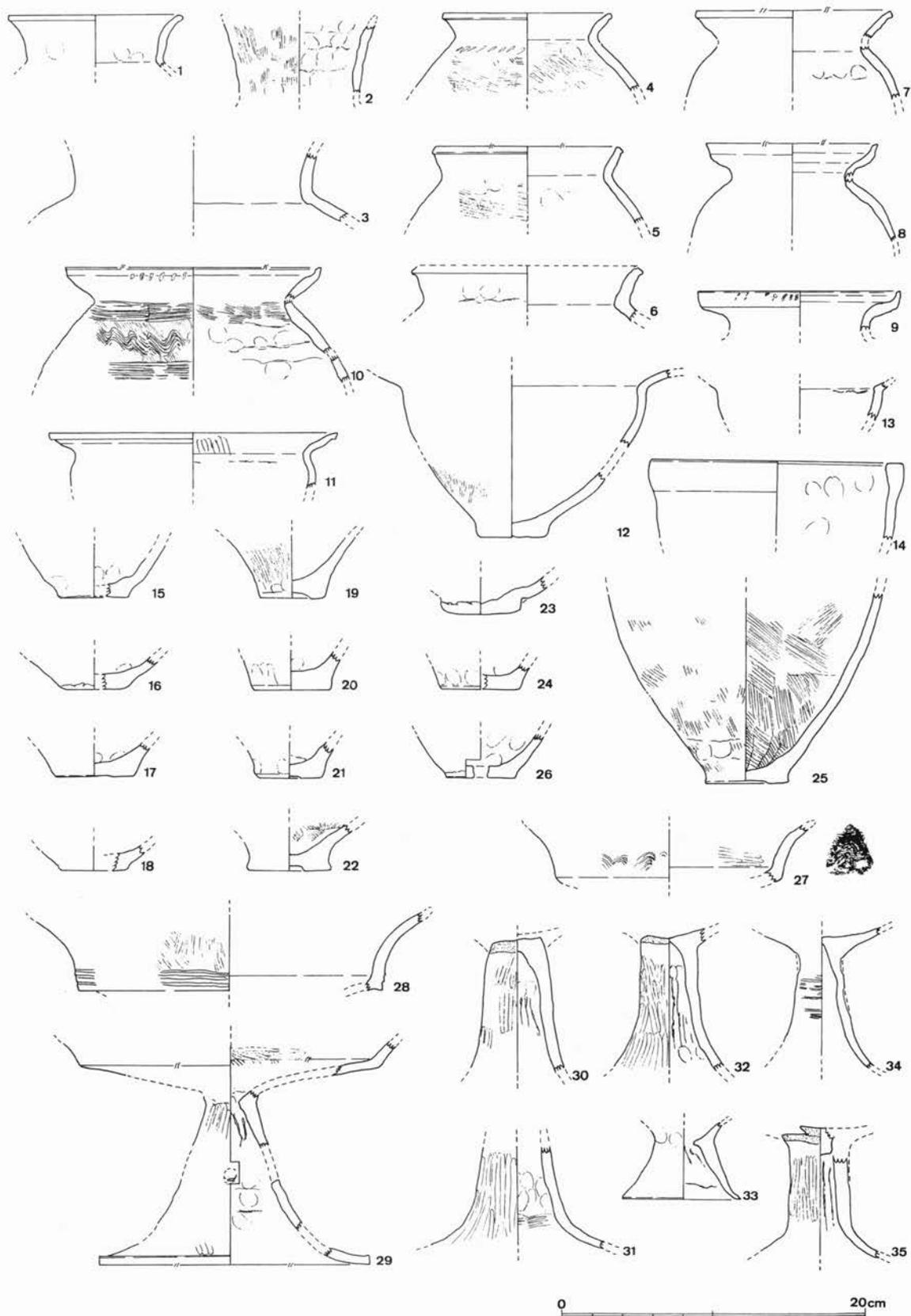
②埴輪(第28図)

52～54は口縁部の破片である。52は口縁部の外面をやや肥厚するものである。53は口縁部外面に突帯を貼り付けたものである。54は52・53と異なり、口縁部はほぼ直口する。55～61は体部の破片である。これらの埴輪片は、いずれも表土または包含層から出土したもので、内田山B 1号墳に伴うものはなかった。なお、埴輪片の特徴や第1次調査の成果から、これらの埴輪片は古墳時代中期初頭ないし前葉のものと考えられる。

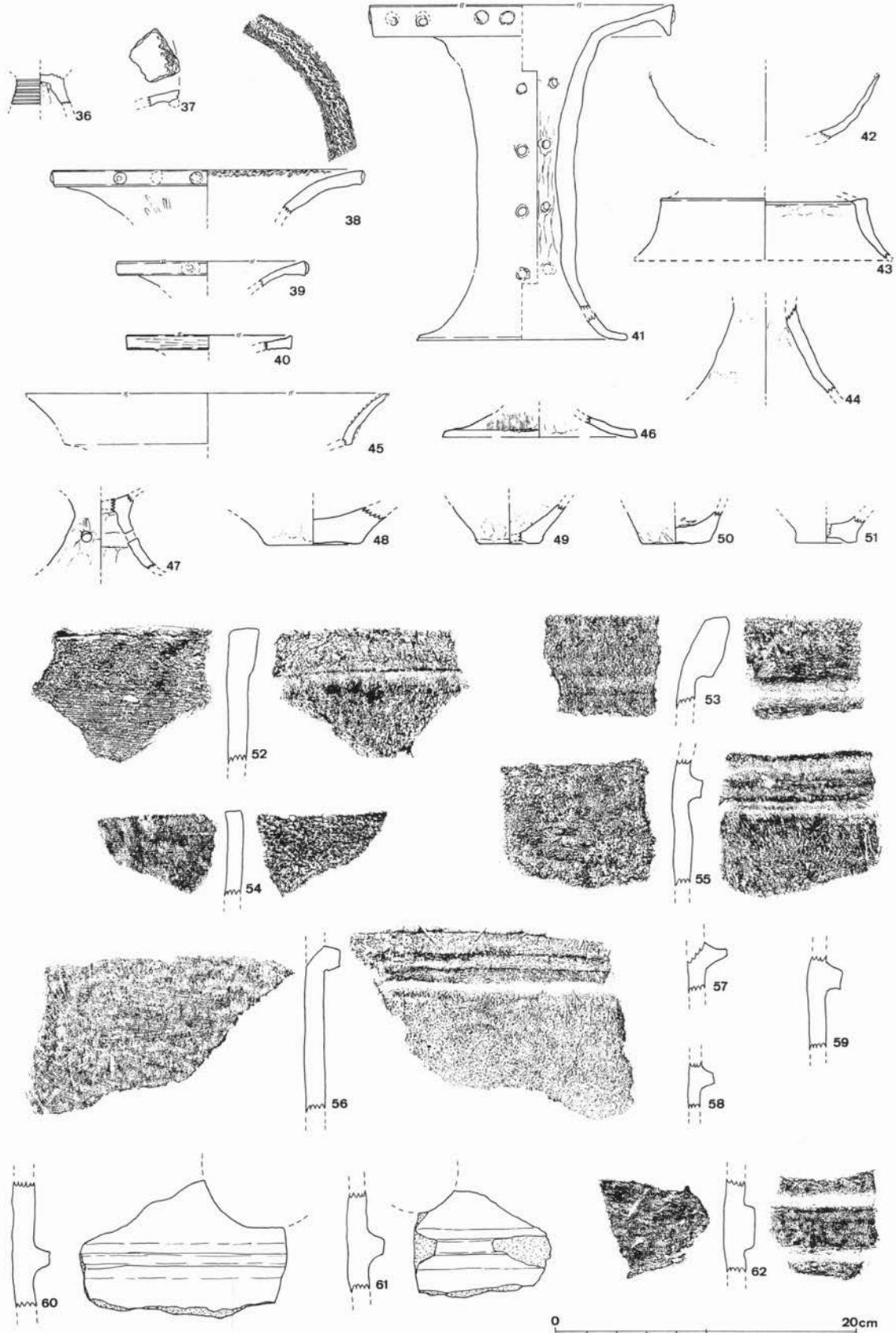
4. まとめ

今回の調査成果については、以下のとおりである。

これまでの調査では、ごく少量の弥生土器片が出土していたのみであったが、今回の調査では、竪穴式住居跡などの遺構を検出することはできなかったものの、多数の弥生土器が出土すると



第27図 内田山遺跡・内田山古墳群出土遺物実測図(1)



第28図 内田山遺跡・内田山古墳群出土遺物実測図(2)

もに、土坑2基と土器溜まり1か所を検出した。したがって、この丘陵上に弥生時代の遺跡が存在する可能性が高まった。ただし、竪穴式住居跡などはこれまで確認されておらず、内田山B1号墳の築造や、近・現代の耕作などによって削平されてしまった可能性がある。また、内田山B1号墳の北側にはやや平坦な地形が広がることから、このあたりに竪穴式住居跡が広がっていた可能性もある。ところで、今回出土した弥生土器は、当遺跡の南に所在する木津城山遺跡出土土器に類似した特徴を有するものが多い。特に、土器溜まりSX113出土土器では、やや時間幅があるかもしれないが、明瞭な柱状脚を呈する高杯がないことや、後出的な受口状口縁甕の存在などから、木津城山遺跡出土土器よりも若干、後出した内容と判断される。木津城山遺跡の土器編年試案では、概ね第3段階に相当すると考えられる。

また、内田山B1号墳については、その東端角を検出したが、東辺は大きく攪乱されて遺存していないことが確認できた。また、今回の調査では多数の埴輪片が出土したが、いずれも内田山B1号墳の墳丘が削平された際に丘陵斜面に転落したものと考えられる。

(筒井崇史)

- 注1 黒坪一樹「木津地区所在遺跡昭和59年度発掘調査概要 (1)赤ヶ平遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第17冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985
筒井崇史・山内基樹ほか「関西文化学術研究都市木津地区所在遺跡平成13年度発掘調査概要 (2)赤ヶ平遺跡(第2次)」(『京都府遺跡調査概報』第105冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002
- 注2 筒井崇史「木津地区所在遺跡平成11年度発掘調査概要 (2)内田山遺跡・内田山古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第95冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000
筒井崇史・山内基樹「木津地区所在遺跡平成12年度発掘調査概要 (2)内田山遺跡・内田山古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第101冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- 注3 調査参加者は以下のとおりである。
上野剛明・岡野奈知子・奥出裕也・金子真理子・古賀友佳子・近藤奈央・佐古裕紀・佐治健一・滝下勝久・筒井由香・寺尾貴美子・中島恵美子・長沼暦・仲山宜孝・松浦弘太郎・松原啓充・森川敦子・安田祐貴子・矢野美佳・山内基樹・山田三喜子・吉永清美
- 注4 筒井崇史ほか「木津城山遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第32冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003

付 載 報 告 1

赤ヶ平遺跡出土のサヌカイト製遺物の石材産地分析

京都大学原子炉実験所 藁科 哲男

はじめに

石器石材の産地を自然科学的手法を用いて、客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法によりサヌカイトおよび黒曜石遺物の石材産地推定を行っている(文献1～3)。

石材移動を証明するには必要条件と十分条件を満たす必要がある。自然の力で移動した岩石の出発露頭を元素分析で求めるとき、移動原石と露頭原石の組成が一致すれば必要条件を満たし、その露頭からの流れたルートを地形学などで証明できれば、十分条件を満たし、ただ1か所の一致する露頭産地の調査のみで移動原石の産地が特定できる。

遺物の産地分析では『石器とある産地の原石が一致したからと言っても、ほかの産地に一致しないと言えないために、一致した産地のものと言い切れないが、しかし一致しなかった場合、その産地のものでないと言い切れる(一部略)』が大原則である。

また、自然科学的分析を用いても、全ての産地が区別できるかは、それぞれが使用している産地分析法によって、それぞれ異なり実際に行ってみなければ分からない。産地分析の結果の信頼性は何か所の原材産地の原石と客観的に比較して得られたかにより、比較した産地が少なければ、信頼性の低い結果と言える。黒曜石、サヌカイトなどの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行い、これを産地を特定する指標とした。

分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと遺物のそれを対比して、各平均値からの離れ具合(マハラノビスの距離)を求める。次に、古代人が採取した原石産出地点と現代人が分析のために採取した原石産出地と異なる地点の可能性は十分に考えられる。したがって、分析した有限個の原石から産地全体の無限に近い個数の平均値と分散を推測して判定を行うホテリングのT²乗検定を行う。この検定を全ての産地について行い、ある石器原材と同じ成分組成の原石はA産地では10個中に1個みられ、B産地では1万個中に1個、C産地では100万個中に1個、D産地では……1個と各産地毎に結果が得られるような、客観的な検定結果からA産地の原石を使用した可能性が高いと同定する。すなわち多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

今回、分析した遺物は京都府相楽郡木津町赤ヶ平に所在する赤ヶ平遺跡出土のサヌカイト製遺

物26個で、産地分析の結果が得られたので報告する。

サヌカイト原石の分析

サヌカイト原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X線分析装置によって元素分析を行う。分析元素はAl、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの12元素をそれぞれ分析した。

試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。サヌカイトでは、K/Ca、Ti/Ca、Mn/Sr、Fe/Sr、Rb/Sr、Y/Sr、Zr/Sr、Nb/Srをそれぞれ用いる。サヌカイトの原産地は、西日本に集中してみられ、石材として良質な原石の産地および質は良くないが、考古学者の間で使用されたのではないかと話題に上る産地、および玄武岩、ガラス質安山岩など、合わせて32か所の調査を終えている。

結果と考察

遺跡から出土した石器、剥片は、風化のためサヌカイト製は表面が白っぽく変色し、新鮮な部分と異なった元素組成になっている可能性が考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に、圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行った。

今回、分析した遺物の結果を表1に示した。石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためRb/Srの一変量だけを考えると、分析番号89541番の遺物はK/Caの値が0.271で、二上山群の[平均値] ± [標準偏差値]は、 0.288 ± 0.010 であるから、遺物と原石群の差を標準偏差値(σ)を基準にして考えると遺物は原石群から 1.7σ 離れている。ところで二上山群の産地から100個の原石を採ってきて分析すると、平均値から $\pm 1.7\sigma$ のずれより大きいものが9個ある。

すなわち、この遺物が、二上山群の原石から作られていたと仮定しても、 1.7σ 以上離れる確率は9%であると言える。だから、二上山群の平均値から 1.7σ しか離れていないときには、この遺物が二上山群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を金山東群に比較すると、金山東群の平均値からの隔たりは、約 14σ である。これを確率の言葉で表現すると、金山東群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から 14σ 以上離れている確率は、百兆分の一であると言える。このように、百兆個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないことから、この遺物は、金山東群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は二上山群に9%の確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たしていることから、二上山群の原石が使用されていると同定され、さらに金山東群に対しては一兆分の1%の低い確率で帰属され、信頼限界の0.1%を満たさないことから金山東産原石でないと同定される」。遺物が二上山群と一致したからと言っても、遺物が二上山産地から採取された証拠はなく、分析している試料は原石でなく遺物で、さらに分析誤差が大きくなる不定形(非破壊分析)であることから、ほかの産地に一致しないとは言えない。同種岩石の中での分類である以上、ほかの産地にも一致する可能性は堆測される。

すなわち、ある産地(二上山産地)に一致し、必要条件を満足したと言っても一致した産地の原石とは限らないために、帰属確率による判断を表1の150個すべての原石群について行い、十分条件を求め、低い確率で帰属された原石群の原石は使用していないとして消していくことにより、はじめて二上山産地の石材のみが使用されていると判定される。

実際はK/Caといった、唯1個の変量だけでなく、前述した8個の変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えばA原産地のA群で、Ca元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量が少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行うホテリングのT²乗検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて、産地を同定する(文献4・5)。産地の同定結果は1個の遺物に対して、サヌカイト製では150個の推定確率結果が得られている。

今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については、低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上「記入」を省略しているが、実際に計算しているため、省略産地の可能性が非常に低いことを確認したという重要な意味を含んでいる。すなわち、二上山産原石と判定された遺物について、香川県白峰産原石や佐賀県多久産、北海道旭山の原石の可能性を考える必要がない結果で、高い確率で同定された産地のみの結果を表2に記入した。原石群を作った原石試料は直径3cm以上であるが、多数の試料を処理するために、小さな遺物試料の分析に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには、原石群の元素組成のバラツキの範囲を越えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行ったときに、判定の信頼限界としている0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。

今回分析した赤ヶ平遺跡出土のサヌカイト製遺物26個で、各産地別使用頻度をみると、二上山産が19個(73%)で、原石産地不明の向出No.49遺物群が6個(23%)で、分析番号89553番は何処の産地にも一致しなかった。この不明の遺物の原材は良質で、ほかの遺跡でも使用されている可能性が推測されるために、遺物の分析場所を変化させて、統計処理が可能な回数分析し、赤ヶ平13遺物群と名付けて、原石・遺物群に登録した。赤ヶ平遺跡では、二上山産が主体的に使用され、二上山地域と交流は推測されるが、金山東産など他地域の原材の伝播がみられないとの結果が得られた。

文献

1. 薬科哲男・東村武信(1975)「蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(Ⅱ)」『考古学と自然科学』8 pp.61-69.
2. 薬科哲男・東村武信・鎌木義昌(1977)・(1978)「蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(Ⅲ)・(Ⅳ)」『考古学と自然科学』10・11 pp.53-81・33-47.
3. 薬科哲男・東村武信(1983)「石器原材の産地分析」『考古学と自然科学』16 pp.59-89.

4. 東村武信(1976)「産地堆定における統計的手法」『考古学と自然科学』9 pp.77-90.
 5. 東村武信(1980)『考古学と物理化学』 学生社

付記 本報告は、紙幅の関係上、本文・図表の一部を省略、編集した。編集は筒井が行った。

表1 赤ヶ平遺跡出土サヌカイト製遺物の元素比分析結果

分析 番号	元 素 比									
	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
89541	0.271	0.221	0.070	4.443	0.190	0.056	0.631	0.015	0.019	0.136
89542	0.278	0.230	0.059	4.558	0.183	0.073	0.695	0.032	0.020	0.131
89543	0.273	0.225	0.070	4.193	0.191	0.048	0.680	0.014	0.020	0.133
89544	0.270	0.224	0.066	4.375	0.204	0.062	0.671	0.012	0.019	0.137
89545	0.309	0.202	0.050	3.790	0.227	0.061	0.690	0.017	0.018	0.140
89546	0.309	0.204	0.048	3.781	0.219	0.054	0.674	0.008	0.020	0.142
89547	0.276	0.224	0.068	4.490	0.189	0.068	0.524	0.017	0.016	0.138
89548	0.273	0.226	0.060	4.552	0.198	0.061	0.651	0.000	0.018	0.131
89549	0.272	0.226	0.063	4.408	0.206	0.072	0.707	0.021	0.017	0.130
89550	0.273	0.229	0.070	4.358	0.186	0.064	0.697	0.017	0.018	0.122
89551	0.278	0.228	0.074	4.595	0.207	0.058	0.651	0.013	0.018	0.120
89552	0.278	0.229	0.081	4.587	0.215	0.054	0.643	0.021	0.021	0.131
89553	0.434	0.202	0.056	3.672	0.237	0.021	0.627	0.012	0.017	0.140
89554	0.305	0.197	0.055	3.879	0.212	0.048	0.671	0.012	0.018	0.135
89555	0.277	0.228	0.069	4.509	0.208	0.048	0.686	0.013	0.021	0.134
89556	0.312	0.203	0.054	3.728	0.213	0.055	0.660	0.016	0.020	0.137
89557	0.309	0.201	0.049	3.762	0.224	0.051	0.676	0.021	0.017	0.137
89558	0.315	0.206	0.046	3.843	0.226	0.035	0.672	0.010	0.019	0.138
89559	0.267	0.220	0.070	4.565	0.182	0.063	0.634	0.023	0.016	0.133
89560	0.283	0.230	0.075	4.562	0.211	0.043	0.642	0.012	0.020	0.145
89561	0.267	0.217	0.078	4.545	0.192	0.069	0.677	0.000	0.015	0.131
89562	0.277	0.225	0.063	4.420	0.210	0.034	0.636	0.017	0.017	0.136
89563	0.274	0.227	0.065	4.343	0.196	0.035	0.633	0.010	0.018	0.127
89564	0.271	0.229	0.056	4.312	0.212	0.051	0.617	0.000	0.017	0.127
89565	0.268	0.224	0.054	4.349	0.183	0.077	0.667	0.029	0.017	0.129
89566	0.279	0.230	0.059	4.386	0.172	0.048	0.553	0.027	0.021	0.134
JG-1	1.273	0.277	0.057	2.674	0.761	0.195	0.783	0.078	0.031	0.405

JG-1: 標準試料-Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol.8 175-192 (1974)

表2 赤ヶ平遺跡出土サヌカイト製遺物の現在産地分析

分析 番号	No.	調査次	地区名	遺構	原石産地(確率)	判定結果
89541	1	第3次	D2.D3.C2.C3.E2.E3.D1.E1.E25	重機掘前後精査中	二上山(72%)	二上山
89542	2	第3次	1トレンチ	SK46	石器1 二上山(4%)永迫2No.18遺跡群(0.3%)	二上山
89543	3	第2次	2トレンチC-24	SX16	石器221 二上山(1%)	二上山
89544	4	第2次	2トレンチ	SX16 5区	石器328 二上山(39%)	二上山
89545	5	第2次	2トレンチC-25	SX16	石器50 向出No.49遺物群(10%)	向出No.49遺物群
89546	6	第2次	2トレンチC-24.25	SX16	石器20 向出No.49遺物群(19%)	向出No.49遺物群
89547	7	第2次	1-2トレンチ	SB15 東西セクション	石器242 二上山(2%)	二上山
89548	8	第2次	1-2トレンチC-23	SB15 セクション以北	石器83 二上山(43%)	二上山
89549	9	第2次	1トレンチ	SB15 4区	石器612 二上山(4%)	二上山
89550	10	第2次	1トレンチ	SB15 4区	石器756 二上山(3%)永迫2No.18遺跡群(0.1%)	二上山
89551	A	第2次	2トレンチC-24.25	SX16	石器26 二上山(77%)	二上山
89552	B	第2次	2トレンチC-24	SX16	石器282 二上山(35%)	二上山
89553	C	第2次	2トレンチC-24	SX16	石器112 赤ヶ平13遺物群(6%)	赤ヶ平13遺物群
89554	D	第2次	2トレンチC-24.25	SX16	石器275 向出No.49遺物群(2%)	向出No.49遺物群
89555	E	第2次	2トレンチC-24.25	SX16	石器13 二上山(12%)	二上山
89556	F	第2次	2トレンチ	SX16 5区	石器324 向出No.49遺物群(24%)	向出No.49遺物群
89557	G	第2次	2トレンチ	SX16 6区	石器323 向出No.49遺物群(12%)	向出No.49遺物群
89558	H	第2次	2トレンチ	SX16 3区	石器10 向出No.49遺物群(2%)	向出No.49遺物群
89559	I	第2次	1-2トレンチC-23	SB15(西側)	石器6 二上山(58%)	二上山
89560	J	第2次	1-2トレンチ	SB15 東西セクション	石器248 二上山(66%)	二上山
89561	K	第2次	1トレンチ	SB15 4区	石器611 二上山(5%)	二上山
89562	L	第2次	1トレンチ	SB15 4区	石器631 二上山(14%)	二上山
89563	M	第2次	1-2トレンチC-23	SB15 セクション以南 灰茶色土	石器63 二上山(13%)	二上山
89564	N	第2次	1-2トレンチC-23	SB15 セクション以南 灰茶色土	石器61 二上山(25%)	二上山
89565	O	第2次	2トレンチC-23	SB15 セクション以北	石器101 二上山(4%)永迫2No.18遺跡群(0.2%)	二上山
89566	P	第2次	1-2トレンチC-23	SB15 セクション以北 灰茶色土	石器51 二上山(1%)	二上山

注意:近年産地分析を行う所が多くなりましたが、判定根拠が曖昧にも関わらず結果のみを報告される場合があります。本報告では日本における各遺跡の産地分析の判定基準を一定にして、産地分析を行っています。判定基準の異なる研究方法(土器様式の基準も研究方法で異なるように)にも関わらず、似た産地名のために同じ結果のように思われるが、全く関係(相互チェックなし)ありません。本研究結果に連続させるには本研究法で再分析が必要です。本報告の分析結果を考古学資料とする場合には常に同じ基準で判定されている結果で古代交流圏などを考察をする必要があります。

付 載 報 告 2

赤ヶ平遺跡出土弥生土器の胎土分析

はじめに

京都府木津町に所在する赤ヶ平遺跡は、木津川中流域の沖積低地に臨む奈良丘陵北東部の斜面縁辺に形成された段丘上に位置する。これまでに3次にわたる発掘調査が行われ、弥生時代を中心とする遺構・遺物が確認されている。その遺物の中心となる弥生土器では、第2次調査において地域的には珍しいとされる前期の土器が遺構から出土しており、第3次調査では、これらとはやや時期の異なる弥生時代前期～中期とされる土器が出土している。これらの土器は、また、その時期の違いとともに土器を作っている土の質(胎土)にも違いのあることが、発掘調査所見の中でも示されている。

本報告では、所見で示された胎土の違いを、分析により検証し、胎土に明瞭な差異があるか、あるいは、それほど差異ではないかを表現することにより、弥生土器の製作に関わる資料を作成する。また、その材質の由来(遺跡周辺の砂や粘土が使用されている可能性)についても検討する。

1. 試料

試料は、第2次調査で遺構より出土した弥生土器片2点(試料番号1・2)と第3次調査で包含層より出土した弥生土器片3点(試料番号3～5)の合計5点である。これらのうち、試料番号1と2は、弥生時代前期とされ、その胎土の外見的な特徴は、赤ヶ平遺跡から出土する弥生土器の多くに見られるものとされている。また、試料番号3～5は、いずれも弥生時代前期～中期とされており、このうち、試料番号3と4は、それぞれ試料番号1と2に胎土の外見的特徴が類似するとされている。また、試料番号5については、やはり胎土の外見的特徴から、河内産である可能性があるとして指摘されている。

表1 試料一覧

試料番号	遺跡名	取上 番号	地区名	遺構・層位	出土年月日	器種・部位	時期	備考(発掘調査者所見)
試料1	赤ヶ平遺跡第2次	—	2トレン チC-25	SX16土器 26	011107	不明	弥生前期	当遺跡において最もポピュラーな胎土の一つ
試料2	赤ヶ平遺跡第2次	—	2トレン チC-25	SX16土器 87	011120	不明	弥生前期	当遺跡において最もポピュラーな胎土の一つ
試料3	赤ヶ平遺跡第3次	5	1トレン チ	西壁南端付近壁 精査中	020606	底部	弥生前期 or 中期	試料1に類似した胎土(肉眼観察による)
試料4	赤ヶ平遺跡第3次	7	1トレン チ	東半分精査中	020610	壺or甕	弥生前期 or 中期	2次調査SX16出土品に類似したものがある。胎土は試料2に類似
試料5	赤ヶ平遺跡第3次	89	1トレン チF-18	(黄)褐色土掘 削中	020723	不明	弥生前期 or 中期	淡い茶褐色を呈する(河内産か)

各試料の出土遺構などについては、表1に示す。

2. 分析方法

胎土分析には、現在さまざまな分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は粉碎による重鉱物分析や薄片作製などがおもに用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。土師器や埴輪のように比較的粗粒の砂粒を含む土器胎土の分析では、前者の方法の方が、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。さらに前者の方法の中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物および岩石片の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。

表2 薄片観察結果

試料番号	砂粒区分	砂粒の種類構成													合計						
		鉱物片																			
		石英	カリ長石	斜長石	斜方輝石	角閃石	酸化角閃石	白雲母	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	チャート	閃緑岩	結晶片岩		岩石片	多結晶石英	花崗岩類	火山ガラス	植物珪酸体	
1	細礫																			0	
	極粗粒砂	1														5	8			14	
	粗粒砂	4				1										2	6			13	
	中粒砂	2													1	1				4	
	細粒砂	3	1	3		1											1			9	
	極細粒砂	7	3	6		2													1	19	
	粗粒シルト	6	5	7		1													1	19	
	中粒シルト	3	3	3		1													1	11	
	基質																				614
	孔隙																				74
2	細礫																	2		3	
	極粗粒砂	6														2	7			15	
	粗粒砂	1														1	7			10	
	中粒砂																		3	3	
	細粒砂	4		1		1													6	12	
	極細粒砂	1	2	1															7	11	
	粗粒シルト	4	3	4															6	2	
	中粒シルト	2	3	2															2	3	
	基質																				441
	孔隙																				48
3	細礫																	4		4	
	極粗粒砂		1														1	7		10	
	粗粒砂	3		5													2	6		18	
	中粒砂	16	2	1	1	1											1			24	
	細粒砂	17	1																	22	
	極細粒砂	12	3	2																20	
	粗粒シルト	7	2	7																16	
	中粒シルト	3	1	5																9	
	基質																				238
	孔隙																				22
4	細礫																			0	
	極粗粒砂	3															2	6		12	
	粗粒砂	1	1															2	1	5	
	中粒砂	3																	4	9	
	細粒砂	4																	8	12	
	極細粒砂	5	1	2		3													10	21	
	粗粒シルト	9	3	5															9	4	
	中粒シルト	3	2	3															1	1	
	基質																				476
	孔隙																				47
5	細礫																	1		1	
	極粗粒砂															6				6	
	粗粒砂			1		1										1	9		2	14	
	中粒砂	4		3		9										1	5			22	
	細粒砂	10		6		24													1	43	
	極細粒砂	9		12		18														45	
	粗粒シルト	4	1	4		12														28	
	中粒シルト	1		1		3														6	
	基質																				296
	孔隙																				21

よび岩石片の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。

この情報をより客観的な方法で表現したものとして、松田ほか(1999)の方法がある。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。

今回の分析で対象とする土師器や埴輪も、同一の地質分布範囲内で作られた可能性もあるため、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは、試料間の胎土の区別ができないことが予想される。このことを考慮し、本分析では松田ほか(1999)の方法を用いる。以下に試料の処理過程を述べる。

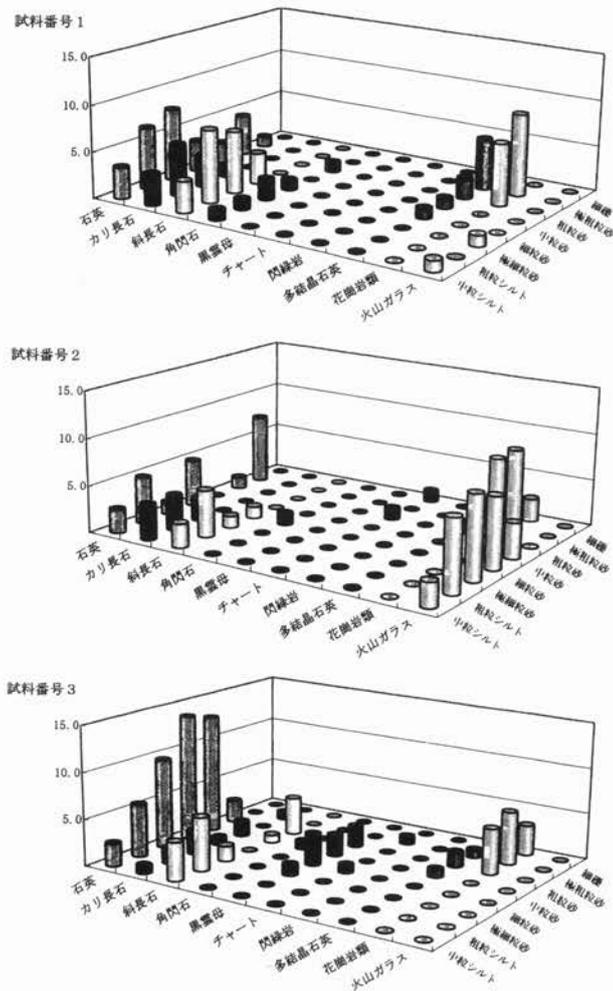
薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的手法を用いて観察し、胎土中に含まれる砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を明らかにした。砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法によりプレパラート全面で計数した。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度、孔隙・砂粒・基質の割合、砂粒の粒径組成を求めた。

3. 結果

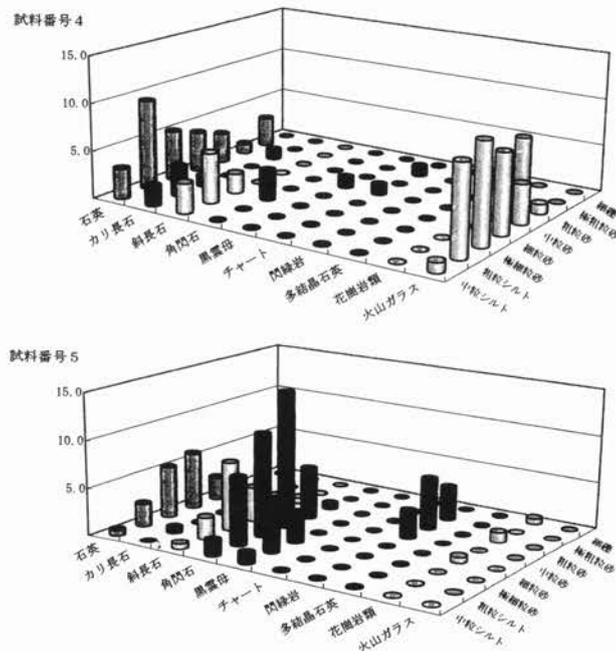
分析結果を表2に示す。この結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度を棒グラフにして第1・2図に示し、孔隙・砂粒・基質の割合を第3図、砂粒の粒径組成を第4図に示す。以下に各試料の胎土の特徴を述べる。

試料番号1：砂全体の粒径組成は、粗粒シルト～極細粒砂および粗粒砂～極粗粒砂にモードのある双峰形を示す。細粒のモードを構成しているのはおもに石英とカリ長石、斜長石の鉱物片であり、粗粒のモードを構成しているのは花崗岩および多結晶石英(これも花崗岩類の細片の可能性もある)の岩片である。碎屑物としては、ほかに微量の角閃石と火山ガラスが含まれる。

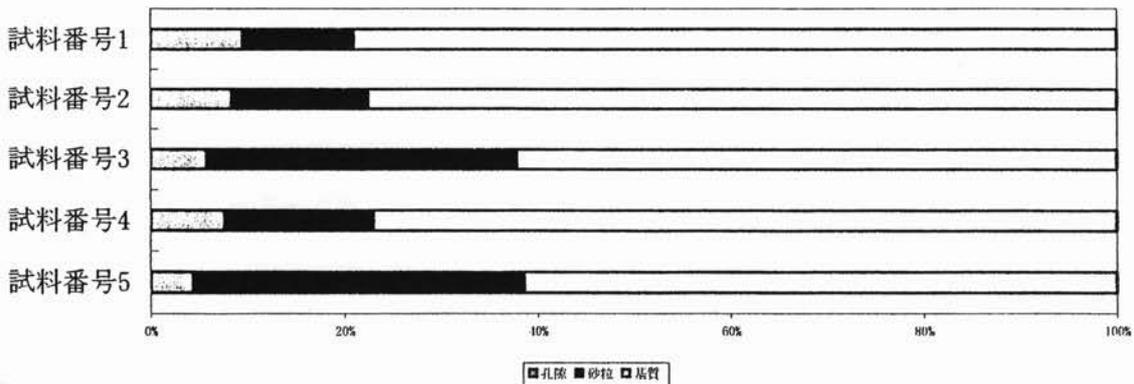
試料番号2：砂全体の粒径組成は、試料番号1と同様に粗粒シルトと極細粒砂をモードとする双峰形を示す。



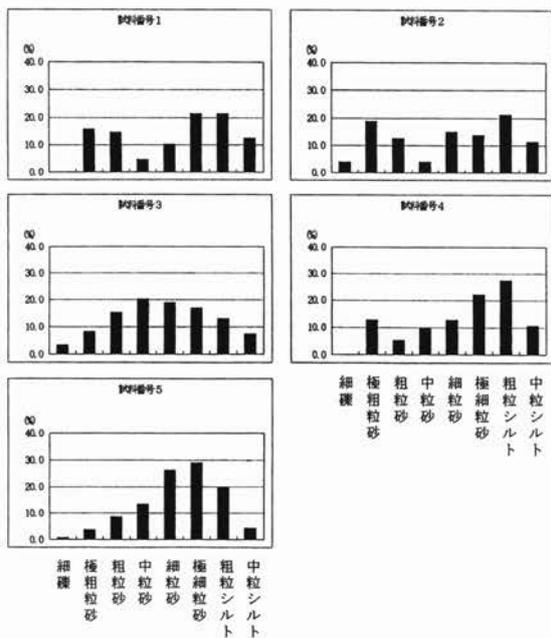
第1図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(1)



第2図 各粒度階における鉱物・岩石出現頻度(2)



第3図 孔隙・砂粒・基質の割合



第4図 胎土中の砂の粒径組成

ただし、細粒のモードを構成している砂粒の主体は火山ガラスであることが、試料番号1とは異なっている。なお、粗粒のモードを構成している砂粒は、試料番号1と同様に花崗岩の岩石片である。また、微量のチャートの岩石片も含まれる。

試料番号3：砂全体の粒径組成は、細粒砂～中粒砂をモードとする傾斜のゆるやかな山形を呈する。砂粒の主体は石英であり、粗粒砂以上では花崗岩が主体となっている。また、細粒砂～粗粒砂には少量の黒雲母が含まれる。なお、砂全体の含有量は、試料番号1および2に比べて20%近く多い。

試料番号4：砂全体の粒径組成は、粗粒シルトをモードとする細粒側に偏った山形を呈

するが、極粗粒砂の割合も高く、双峰形に近いとも見ることができる。砂粒の主体は石英と火山ガラスである。また、極粗粒砂の主体は花崗岩となっている。ほかに微量～少量の角閃石、黒雲母の鉱物片とチャートの岩石片が含まれる。なお、砂全体の含有量は、試料番号1や2と同程度である。

試料番号5：砂全体の粒径組成は、極細粒砂～細粒砂をモードとし、細粒側では傾斜の急な、粗粒側には傾斜のゆるやかな山形を呈する。砂粒の主体を構成しているのが角閃石であることが、ほかの試料と大きく異なる特徴である。

また、粗粒シルト～極細粒砂で黒雲母も比較的多く、中粒砂～極粗粒砂で閃緑岩の岩石片が比較的多いこと、さらには火山ガラスが認められないこともほかの試料と異なる特徴として指摘できる。なお、砂全体の含有量は、試料番号3と同程度に多い。

4. 考察

今回の分析では、試料5点の胎土にそれぞれ特徴があり、5種類の胎土を確認することができた。すなわち、赤ヶ平遺跡から出土する弥生土器には、最低5種類以上の製作事情の異なる土器が混在しているということになる。ただし、その5種類の中でも、互いに等距離に異なるわけではなく、関係が近いと考えられるものと、明らかに他地域からの搬入と考えられるものが存在する。

まず、ともに弥生時代前期とされ、同一遺構から出土した試料番号1と2は、砂の含有量および粒径組成ともに類似することから、同じ製作技術のもとに作られた土器である可能性がある。両試料間の違いである火山ガラスについては、その由来を遺跡が立地している奈良丘陵の地質に求めることができる。奈良丘陵の地質については、尾崎ほか(2000)に詳しい。これに従えば、その主体は、新第三紀鮮新世末～第四紀更新世前期に形成した砂、礫、シルトからなる大阪層群である。大阪層群の地層中には、細粒の火山ガラスからなるテフラ層が多数狭在しており、これらのテフラ層に由来する火山ガラスが土器胎土中に含まれていると考えられる。ここで、土器の製作時のことを考えると、素地の一部として丘陵の崖などから大阪層群を構成する砂あるいはシルトを採取していた中に、たまたまテフラ層が含まれていたために、試料番号1と試料番号2のような胎土の違いが生じた可能性がある。これは、まだ想像の段階でしかないが、今後、類例を蓄積することにより、検証は可能と考えられる。

次に、試料番号3については、砂の含有量、粒径組成ともに試料番号1・2とは明瞭に異なる。前述のように試料番号3は、試料番号1・2とは時期が異なるとされていることから、時期とともに、材料の選択や素地の調整なども変化したことが窺える。ただし、砂を構成している鉱物片や岩石片の種類については、試料番号1・2と共通する点が多い。すなわち3点ともに、鉱物片では石英、カリ長石、斜長石を主体とし、微量または少量の角閃石を伴い、岩石片では花崗岩および多結晶石英が比較的多く、微量のチャートを伴う。これらの共通点は、3点の土器がいずれも、共通の地質学的背景をもつ地域内で作られたことを示唆する。上述の尾崎ほか(2000)や日本の地質「近畿地方」編集委員会(1987)などから、赤ヶ平遺跡の位置する木津川流域の地質を概観すれば、中生代白亜紀の領家花崗岩類とジュラ紀の丹波帯とよばれる砂岩・泥岩・チャートからなる中・古生層によりおもに構成されている。土器胎土中の碎屑物のうち、カリ長石、斜長石、角閃石および多結晶石英、花崗岩類は、領家花崗岩類に由来し、チャートは丹波帯に由来すると考えれば、上記3点の土器胎土は、遺跡の所在地を含む木津川流域内で作られたことを示唆していると考えられる。

試料番号4については、砂の含有量は試料番号1・2と近似しており、粒径組成は双峰性が窺える点で、これも試料番号1・2に近いと言える。さらに鉱物片と岩石片の組成では、上述の木津川流域を示すものであり、特に火山ガラスの多いことでは試料番号2に近い。したがって、試料番号4は、試料番号3以上に試料番号1・2に近い胎土となる。試料番号4は、発掘調査所見では、時期の違いが指摘されているが、試料番号1・2を作った情報が共有される同じ時期の土

器である可能性もある。

試料番号5は、砂の含有量や粒径組成もほかの試料とは異なるが、それ以上に鈳物片および岩石片の組成がほかの試料と異なることで、上述した木津川流域で作られた土器ではなく、ほかの地域から持ち込まれた土器である可能性が高い。発掘調査所見では、河内産である可能性があるとしてされているが、その根拠は多量の角閃石である。河内地域で多量の角閃石の由来となる地質は、生駒斑れい岩と呼ばれているおもに角閃石斑れい岩からなる岩体である(生駒山地領家帯研究グループ1986)。今回の試料番号5では、岩石片はいずれも極粗砂径以下であるため、閃緑岩と花崗岩に同定したが、閃緑岩とした岩石片の中には斑れい岩に由来する岩石片も混在している可能性がある。また、試料番号5では、黒雲母の割合も高いが、これは生駒斑れい岩を取り囲む領家花崗岩に由来する可能性がある。以上のことから、試料番号5は河内産いわゆる生駒西麓産の土器である可能性がある。

今回の分析は、5点のみの試料によるものであるが、それでも5種類の異なる胎土が認識され、また、木津川流域を示す特徴や河内産の可能性のある鈳物片・岩石片組成も認めることができた。今後、木津川流域の弥生土器を継続的に分析を行うことができれば、土器胎土を通した弥生時代の人々の動態に関わる資料が得られることが期待される。

引用文献

- 生駒山地領家帯研究グループ(1986)「生駒山はんれい岩体について」『地球科学』40 pp.102-114.
松田順一郎・三輪若葉・別所秀高(1999)「瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察—岩石学的・堆積学的による—」『日本文化財科学会第16回大会研究発表要旨集』 pp.120-121.
日本の地質「近畿地方」編集委員会(1987)『日本の地質6 近畿地方』 共立出版 p.297
尾崎正紀・寒川旭・宮崎一博・西岡芳晴・宮地良典・竹内圭史・田口雄作(2000)「奈良地域の地質」『地域地質研究報告(5万分の1図幅)』 地質調査所 p.162

補記 本分析については、(株)パリノ・サーヴェイに委託した。

圖 版

図版第1 三角古墳群



(1)遠景(東から)



(2)三角2号墳近景(東から)



(3)1号経塚近景(北西から)

図版第2 三角古墳群



(1) 1号経塚筒型容器出土状況
(東から)



(2) 三角3号墳近景(西から)



(3) 三角3号墳主体部、2・3号
経塚検出状況(西から)

図版第3 三角古墳群

(1) 3号経塚数珠玉出土状況
(東から)



(2) 三角3号墳主体部断ち割り状況
(南から)



(3) 三角3号墳主体部断ち割り断面
(東から)



図版第4 三角古墳群



(1)三角4号墳近景(北から)



(2)三角4号墳石室近景(南から)



調査地遠景(南東から)

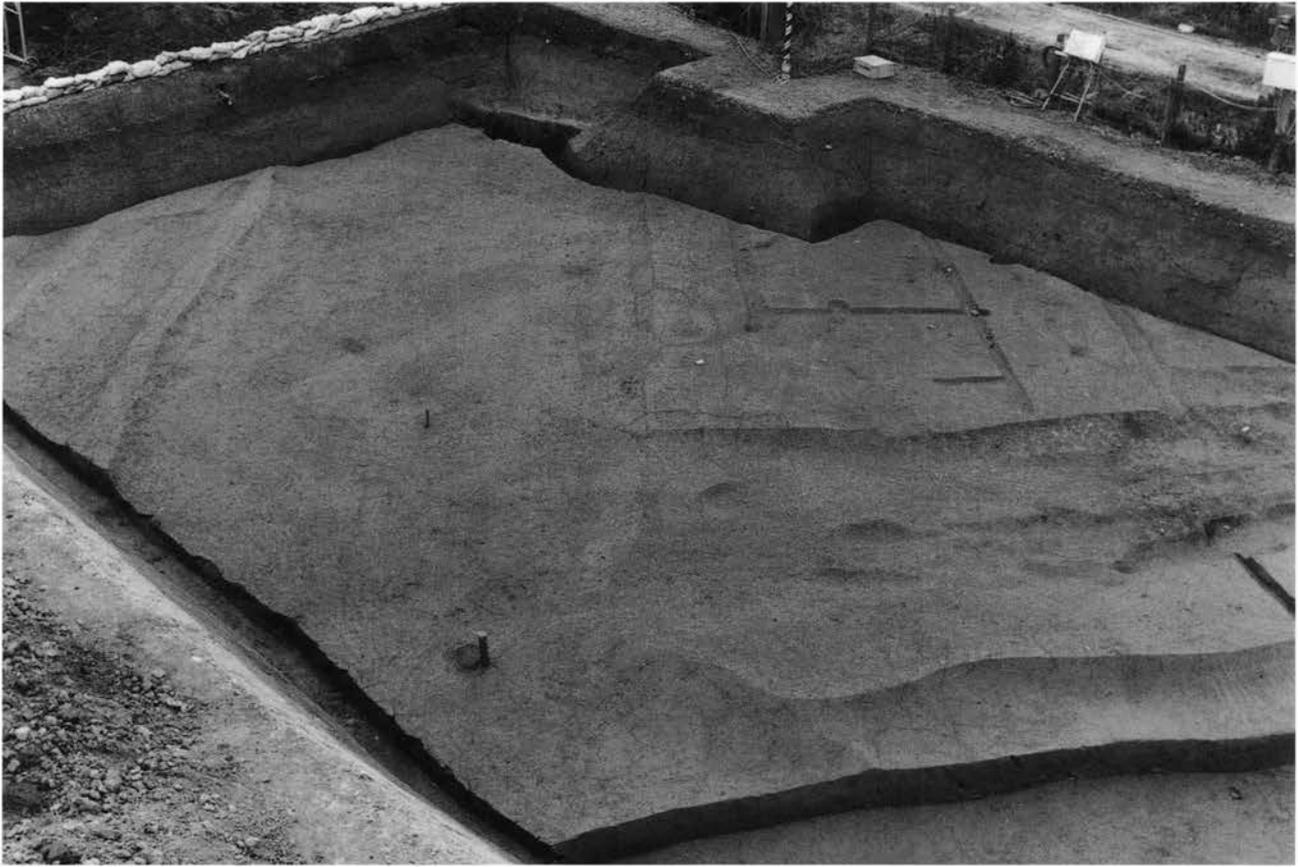


(1) トレンチ全景(北西から)

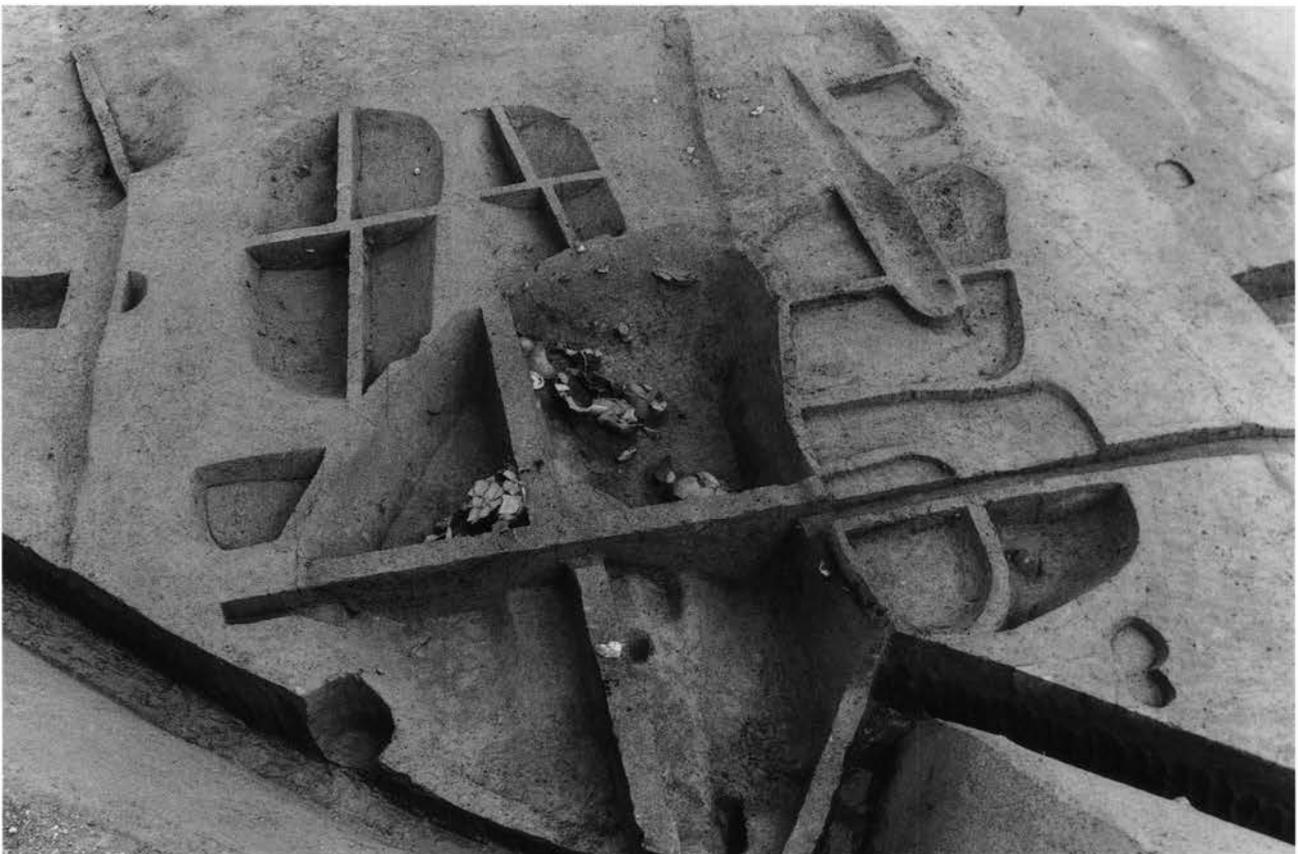


(2) 近世遺構(南西から)

図版第7 内里八丁遺跡第19次



(1)中世遺構(北から)



(2)古代遺構(西から)



(1)土坑 S K06断面(北西から)



(2)溝 S D07・35(西から)



(1)溝 S D07・35(北西から)



(2)溝 S D07遺物出土状況(西から)



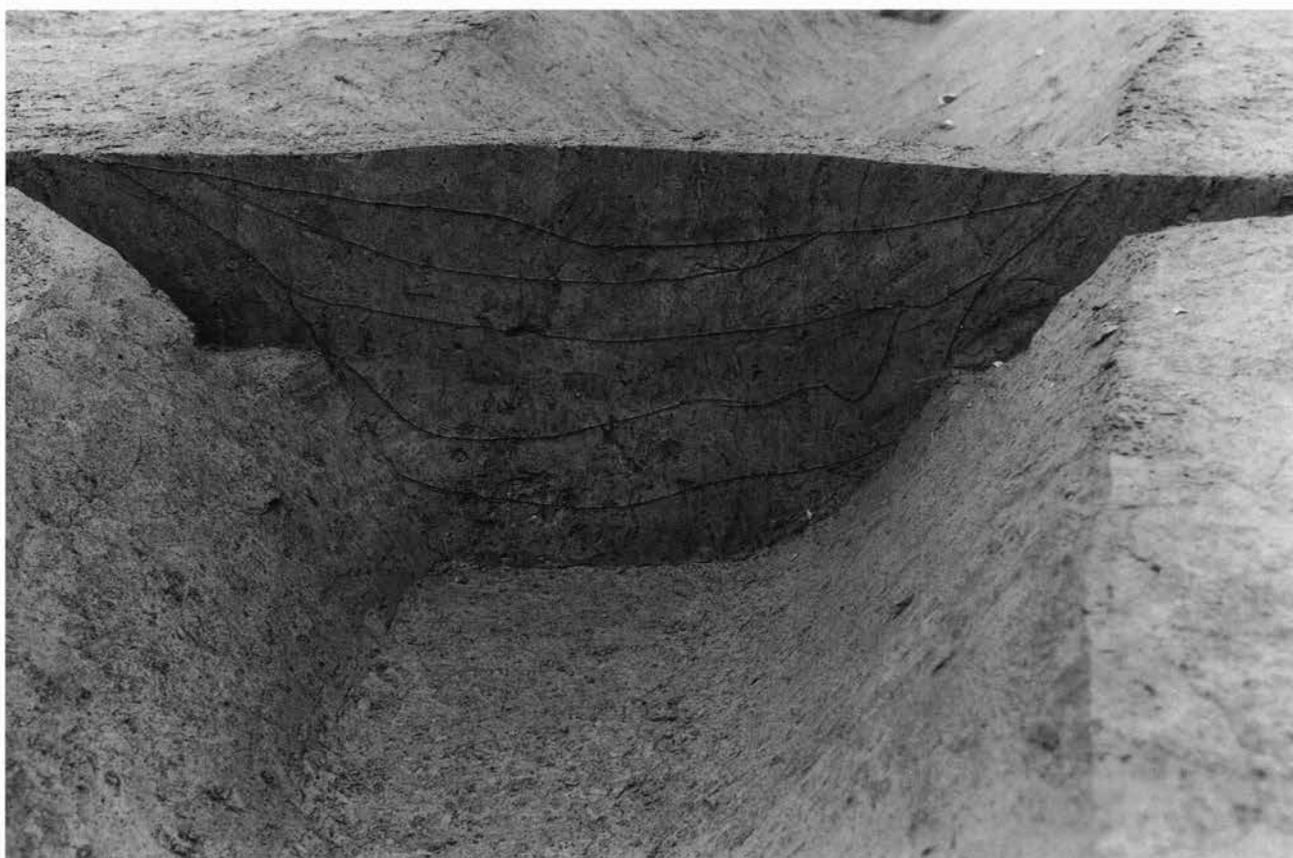
(1)溝 S D35遺物出土状況(南西から)



(2)溝 S D35遺物出土状況(南から)



(1)溝 S D29(西から)



(2)溝 S D29断面(西から)



2



6



8



10



11



14



19



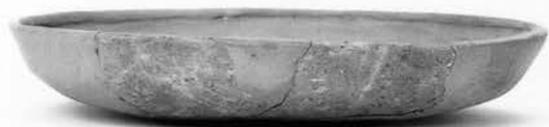
15



17



13



21



39



22



40



18



37



32



38



33



24



25



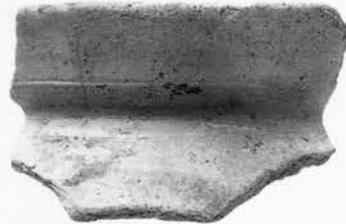
23



41



43



44



46



45

図版第15 赤ヶ平遺跡(第3次)



(1)遺跡全景(北から)



(2)遺跡全景(東から)

図版第16 赤ヶ平遺跡(第3次)



(1)第1トレンチ上層遺構全景
(西から)



(2)第1トレンチ下層遺構全景
(西から)



(3)第1トレンチ土坑S K62
遺物出土状況(南から)



(1)第2・5トレンチ全景(西から)



(2)第4トレンチ全景(北から)



(3)第4トレンチ木棺墓S X63全景
(南東から)



(1)第3トレンチ土坑S K64全景
(西から)



(2)本調査土坑S K84遺物出土状況
(東から)



(3)第1トレンチ作業風景

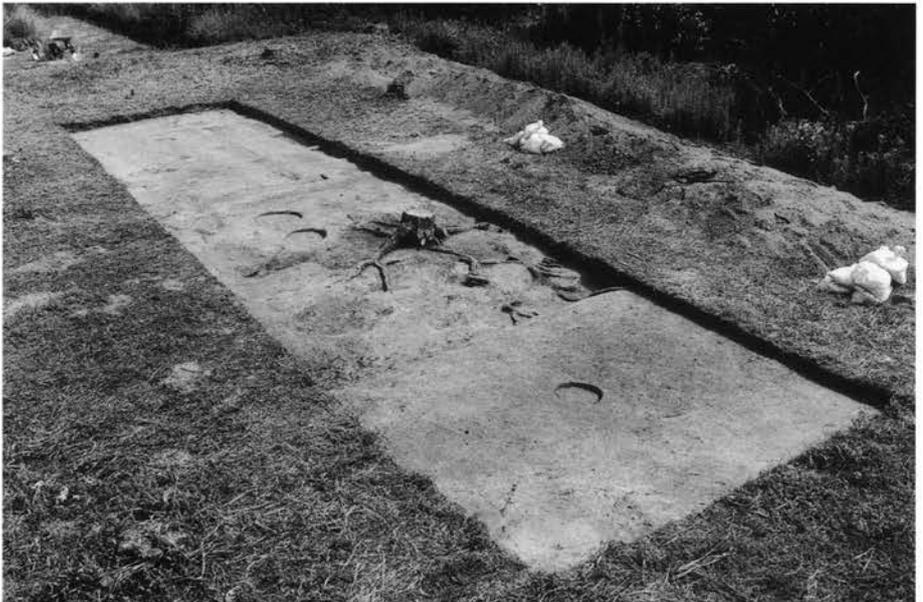
図版第19 赤ヶ平遺跡(第3次)



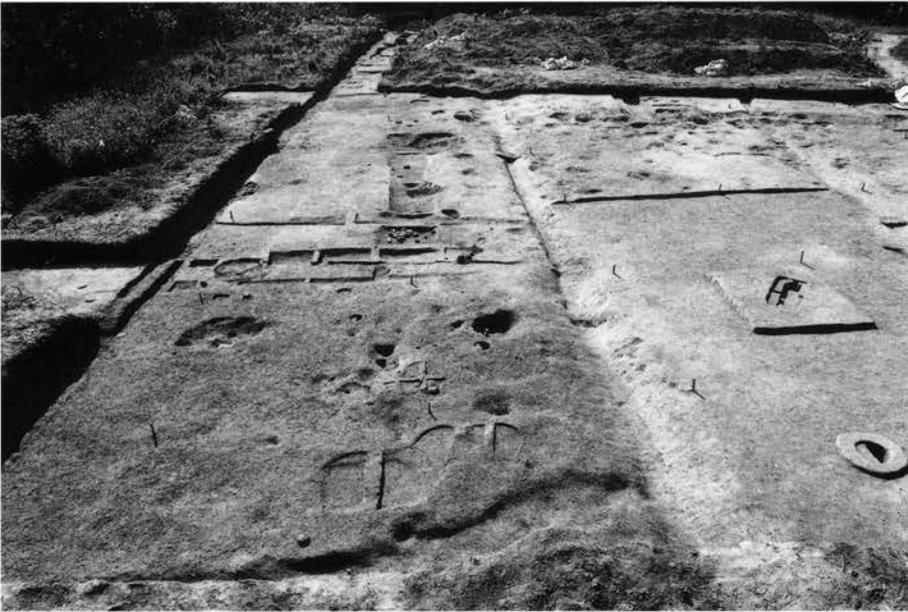
(1)本調査地全景(南東から)



(2)本調査地全景(北西から)



(3)第6トレンチ全景(南東から)



(1)本調査溝 S D76全景(東から)



(2)本調査溝 S D74・75全景
(北から)



(3)関係者説明会風景



(1)片山2号墳調査前全景
(南東から)



(2)片山2号墳調査後全景
(南東から)



(3)試掘調査地全景(南東から)



(1)調査地全景(北から)



(2)調査地全景(上が南)



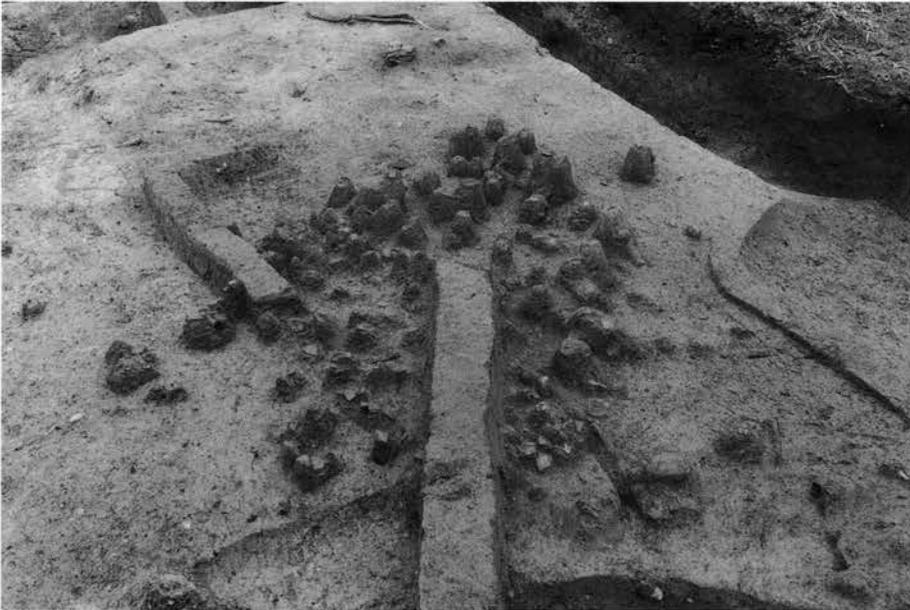
(1)第6・7トレンチ全景(北東から)



(2)第6・7トレンチ全景(東から)



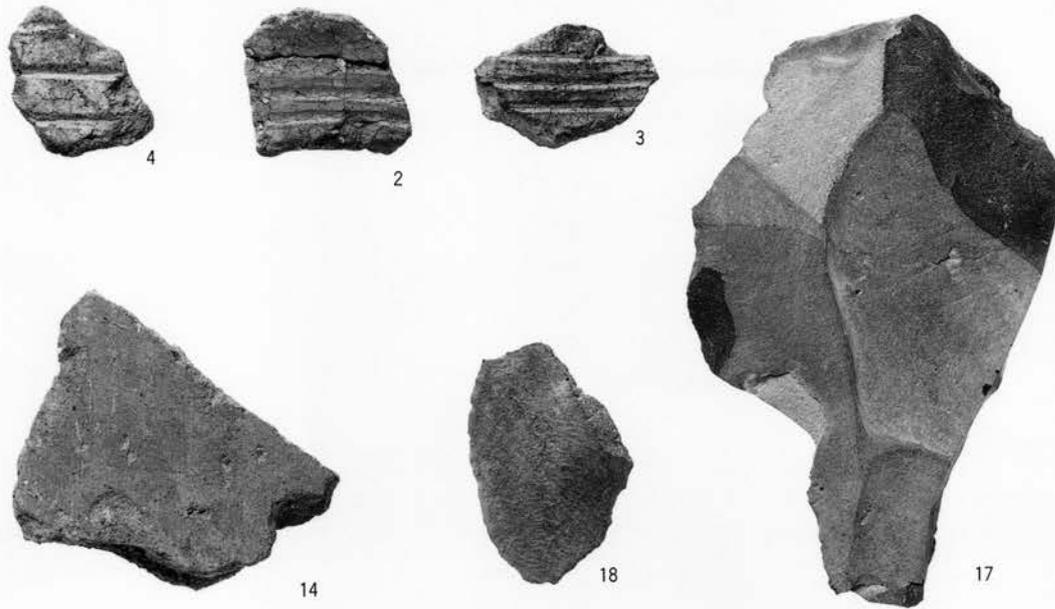
(1)調査作業風景(北東から)



(2)土器溜まり S X 113遺物出土
状況(南西から)



(3)土坑 S K 101遺物出土状況
(北東から)



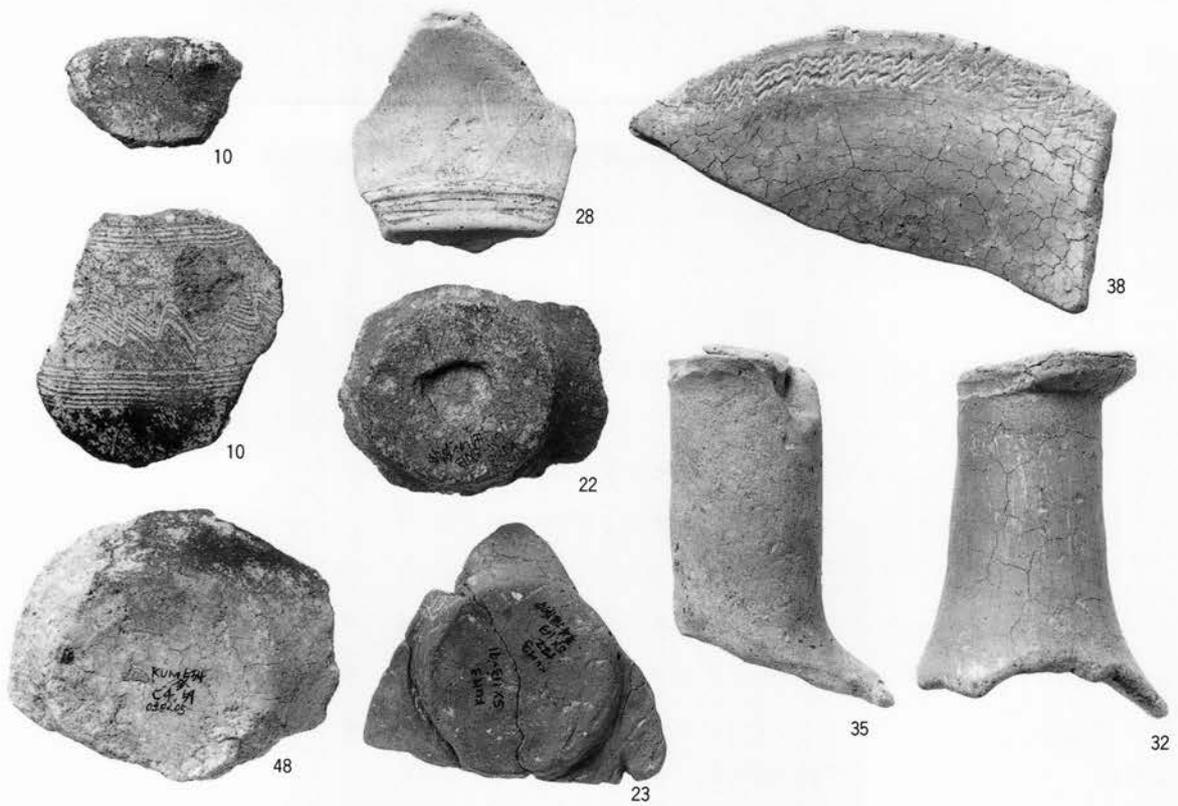
(1)赤ヶ平遺跡出土遺物



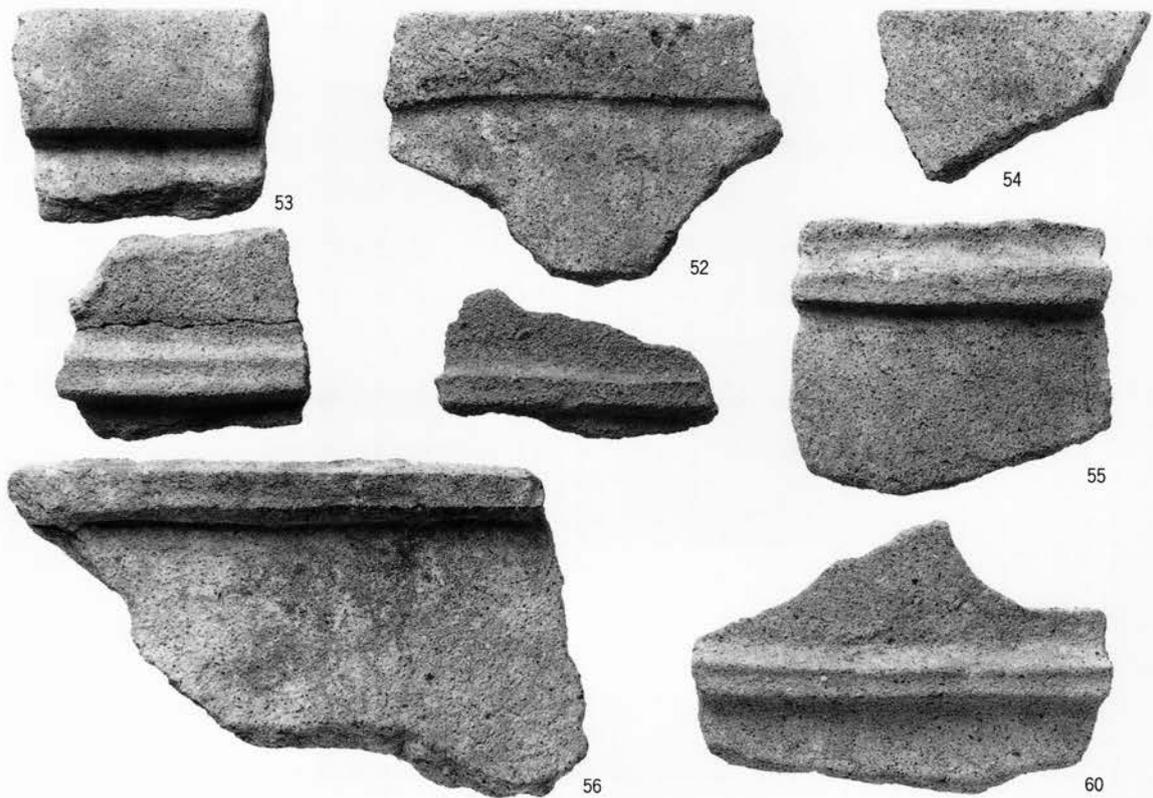
41

25

(2)内田山遺跡出土遺物(1)

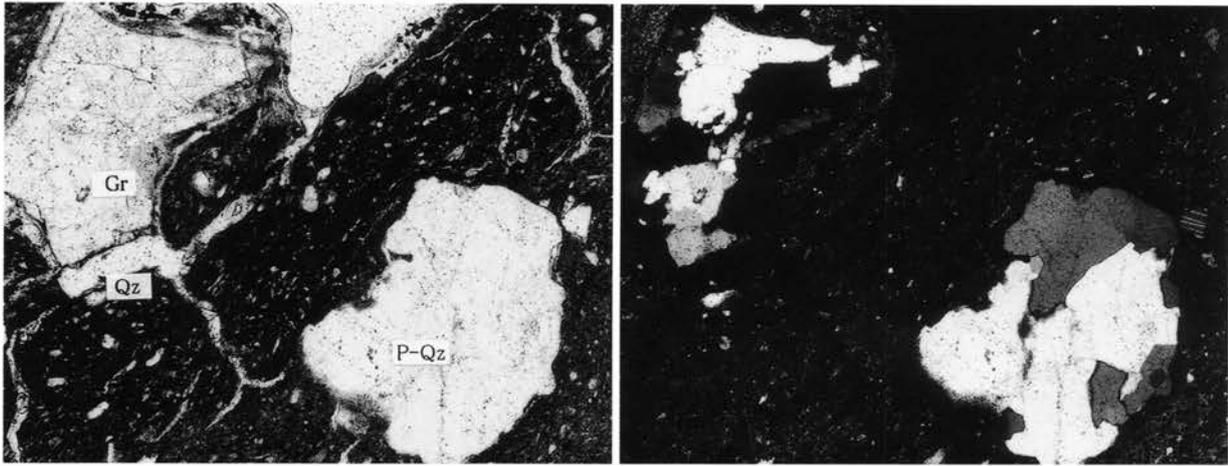


(1)内田山遺跡出土遺物(2)

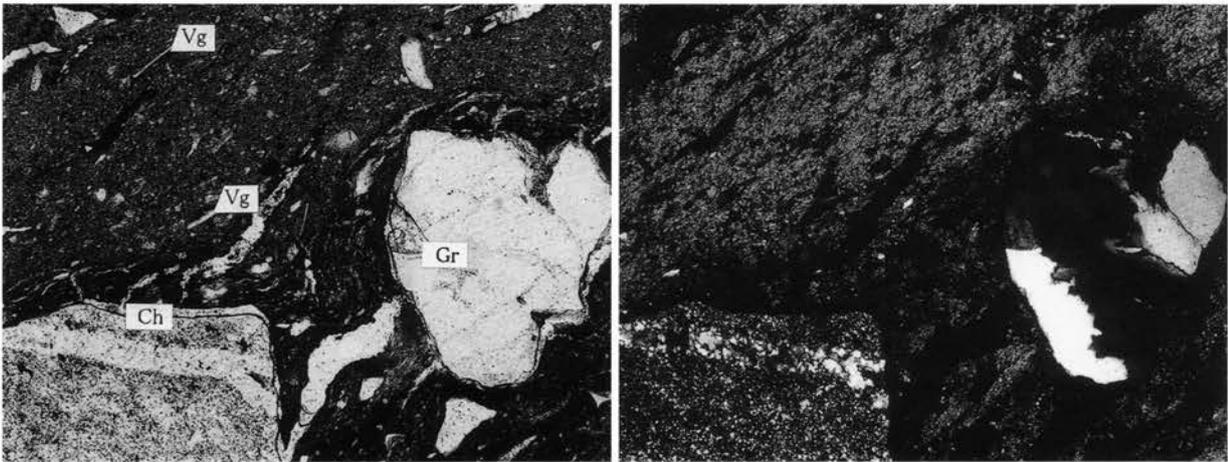


(2)内田山古墳群出土遺物

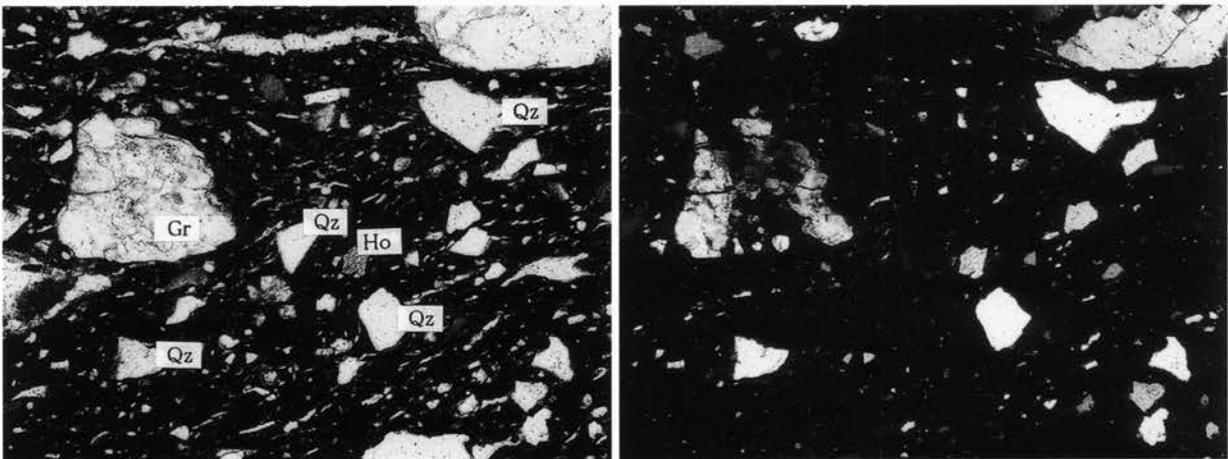
図版第27 赤ヶ平遺跡(第3次)



1. 試料1 赤ヶ平遺跡 第2次 2トレンチ C-25 S X16 土器26 '01.11.07



2. 試料2 赤ヶ平遺跡 第2次 2トレンチ C-25 S X16 土器87 '01.11.20

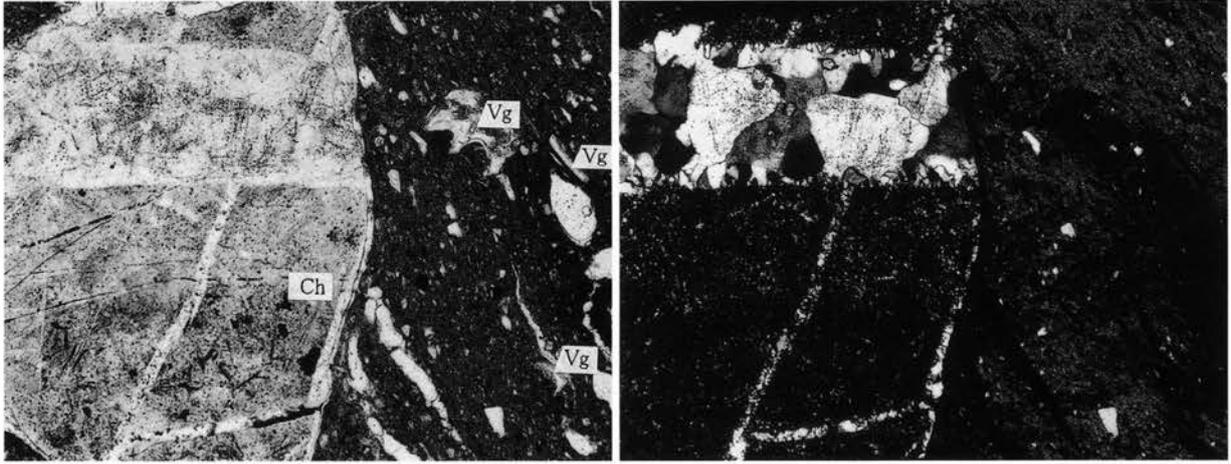


3. 試料3 赤ヶ平遺跡 第3次 取上番号5 1トレンチ 西壁南端付近壁精査中 '02.06.06

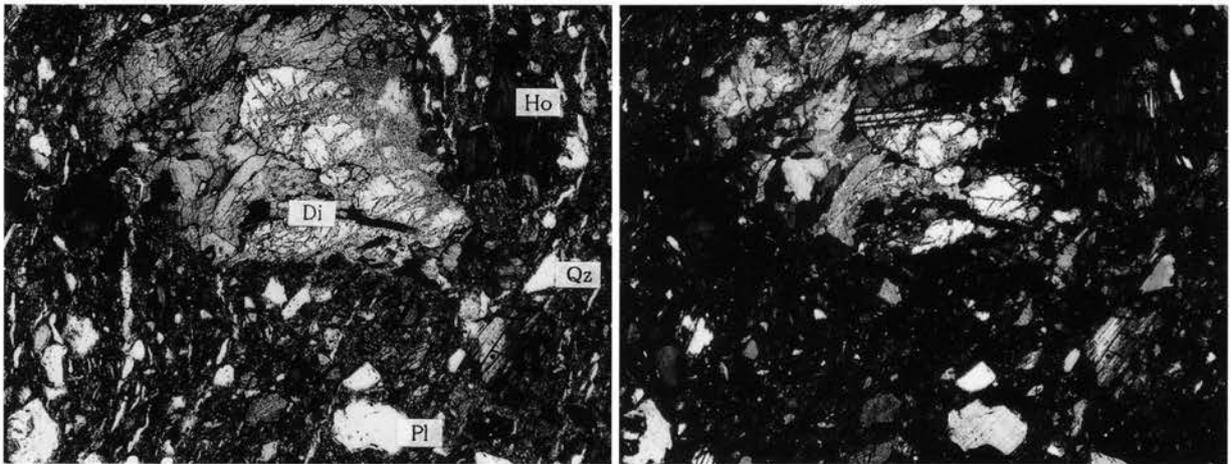
Qz: 石英, P-Qz: 多結晶石英. Ho: 角閃石.
Ch: チャート. Gr: 花崗石. Vg: 火山ガラス.

写真左列は下方ポーラー、写真右列は直行ポーラー下。

0.5mm



4. 試料4 赤ヶ平遺跡 第3次 取上番号7 1トレンチ 東半分精査中 '02.06.10



5. 試料5 赤ヶ平遺跡 第3次 取上番号89 1トレンチ F-18 (黄) 褐色土掘削中 '02.07.23

Qz: 石英, Pl: 斜長石, Ho: 角閃石, Ch: チャート, Di: 閃緑岩, Vg: 火山ガラス.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直行ポーラー下。

0.5mm

胎土薄片(2)

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第109冊							
編著者名								
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3				Phone 075(933)3877			
発行年月日	西暦 2003 年 12 月 26 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
みすみこふんぐん 三角古墳群	きょうとふまいづるしあざしもあぐ 京都府舞鶴市宇下安久	26202		35° 28' 5"	135° 19' 57"	20030424 ～ 20030610	300	道路建設
うちさと はつちょう いせきだい じゅうきゅう うじ 内里八丁遺跡 第19次	きょうとふやわた しおおあざうちさと こあざひゅうが どう 京都府八幡市大字 内里小字日向堂	26210	37	34° 51' 49"	135° 44' 6"	20021218 ～ 20030305	400	道路建設
あかがひら いせきだい さんじ 赤ヶ平遺跡 第3次	きょうとふそうら くぐんきづちょう おおあざきづこあ ざあかがひら 京都府相楽郡木津 町大字木津小字 赤ヶ平	26362	50	34° 44' 23"	135° 50' 1"	20020604 ～ 20021010	800	宅地造成
かたやまこ ふんぐん 片山古墳群	きょうとふそうら くぐんきづちょう おおあざきづこあ ざかたやま 京都府相楽郡木津 町大字木津小字片 山	26362	40	34° 44' 5"	135° 49' 45"	20021028 ～ 20030120	330	宅地造成
うちだやま いせき・う ちだやまこ ふんぐんだ いさんじ 内田山遺跡・内田山 古墳群第3次	きょうとふそうら くぐんきづちょう おおあざきづこあ ざうちだやま 京都府相楽郡木津 町大字木津小字内 田山	26362	53・54-4	34° 44' 9"	135° 49' 46"	20030121 ～ 20030227	170	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三角古墳群	古墳 経塚	古墳後期 中世	円墳3基/木棺直葬墳2基/横 穴式石室墳1基 経塚3基/埋納土坑	土師製筒型容器/水 晶製数珠玉	試掘
内里八丁遺 跡第19次	集落 耕作地	古墳時代前期 飛鳥/奈良 中世 近世	溝/土坑 溝/土坑 溝/鳥畠 溝/鳥畠	土師器 須恵器/土師器	
赤ヶ平遺跡 第3次	集落 墓 耕作地	弥生 弥生～古墳 中世	土坑 木棺墓 溝/土坑	弥生土器/サヌカイ ト製剥片 土師器/瓦質土器	試掘
片山古墳群	—	—	なし	なし	試掘
内田山遺 跡・内田山 古墳群第3 次	集落 古墳	弥生 古墳中期	土坑/土器溜まり 墳丘裾	弥生土器 埴輪片	内田山B 1 号墳

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

京都府遺跡調査概報 第109冊

平成15年12月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)